
ただし、使うとズボンが濡れる。

鳳凰院凶魔（笑）

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただし、使うとズボンが濡れる。

【Zコード】

Z3767S

【作者名】

鳳凰院凶魔（笑）

【あらすじ】

気がつけば異世界。無職25歳、田中一ががんばるお話。
人と出会い、色々思い、考え、挫折し、努力し、成長する物語

…にしたいと思っています。

テンプレですが、楽しんでくれる人がいると、嬉しい限りです。亀更新（予定）初めての作品で、色々とおかしな点が出てくると思いますが、ほどほどのご注意などよろしくお願ひします。

「おめでとうございます。これでハジメ様はランククロにアップしました」

受付嬢のお姉さんが営業スマイルを浮かべ、ランクが上がったことを告げる。

俗に言う「冒険者」を始めることになり、苦節三ヶ月。この世界、「Hランク」に来てから約半年目のことだった。

「報酬はギルドカードに振り込んでおきます。早速新しい依頼を受けますか？」

「いや、やめておきます。今日はゆっくり休みたいので」

お疲れ様でした、といつ受付嬢の声を背に、ハジメはギルドから出る。時間的にはまだお昼過ぎだからか、街は人で溢れ返っている。あちこちから威勢のいい呼び込みの声が聞こえる。

「ランククロか……。」

そう呟きながら、自分のギルドカードを見る。そこには、日本語ではない文字で名前とギルドランクが書かれている。

ハジメ＝タナカ D

銅を原料にしたのかと思われる茶色のカード、ここでの身分証も兼ねている。言葉は通じるのに文字が読めないのはこの世界に来たときから変わらない。日常会話程度ならなんとか読めるように勉強をしてきた。

「そんなお金も溜まつてきたし……村に一旦戻るつかな……」

適当な店に入り、お昼を済ませながらハジメは考えていた。この世界にいつの間にかたどり着き、路頭に迷っていたところを偶然が重なりお世話になることになつた村。小さな村だが、ハジメにとつては恩のある村だった。

「よし、ランクロの依頼つてのを受けて、それから村に帰ろう」

そう結論を出し、ハジメは来た道を戻る。先ほどより少し人が少なくなつたギルドに入り、依頼掲示板を見る。そこにはランクEからBまでの依頼が壁一面に張り出されている。

ランクA以上の依頼はその町のギルド長の下にあり、依頼達成ができる者にしか依頼されないといつ。

「ん~……」Jはやつぱり街の中の依頼を受けたいんだが……討伐系は危険だしな

なるべく安全な依頼を探すが、討伐系以外見当たらぬ。ハジメはランクEの頃から、比較的安全性の高い町での雑務を多く受けてきた。

「Jの世界では命の危険が常に傍にある」

これが、この半年で学んだことである。地球とは違う。日本とは違う。そんな世界に来てしまつたのだ。

仕方ない、と一枚の依頼を受けることにする。壁から紙をはずし、

受付に持つていぐ。先ほどあつた受付嬢がいつもの営業スマイルで応対する。

「ランクD、ゴブリン討伐ですね。補足情報ですが、一体ゴブリンリーダーを見たという情報があります。リーダーは必ず討伐してください。よろしいでしょうか?」

ゴブリン自体はランクEの冒険者でも討伐可能なモンスターであるが、リーダーがいると、徒党を組み、群れる。そうなると少し厄介になる。ランクEの冒険者…かけだしではつらくなるので、ランクDに位置されている。

ハジメはゴブリンやゴブリンリーダーと戦うのは初めてではなかった。まだ冒険者になる前、村にいた頃に一度村人と一緒に戦っているのだ。あの頃の自分よりは強くなつたからいけるだろう、と判断し依頼を受ける。

「時間を掛けるほど依頼達成が困難になる恐れがありますので、で
きるだけ早く処理をお願いします」

「わかりました。今から準備して行つてきます」

「お待ちください。僭越ながら申し上げますが、ハジメ様は今日ランクEの依頼をこなしたばかりです。今日一日はしっかりと休んで、明日以降任務を行つてください。そのほうがハジメ様の生存率が上
がります。」

思わぬ提案に一瞬ハジメはポカンとするが、受付嬢の営業スマイルとは違つた微笑に、はい、としか答えられなかつた。

ギルドを出て、今日一日掛けて準備をするか、と道具屋に向かおうとしたところで、ハジメに声を掛けてくる大男がいた。

「よつ！景気はどうだ！ハジメ！ガハハハハ」

「メートルはある長身、それに見合つだけのがつしりした体格、背中にはハジメほどの大きさはゆうにある巨大な斧。しかし顔は愛らしい熊。獣人族のバルカンだった。

「バルカン…ランクがやつとロに上がったところ。バルカン…そ…仕事上がりか？」

「ガハハハ！ああ！ちょっと人食い熊をな！」のワシが熊退治なんぞ！笑えるだろ！ガハハハ！」

人食い熊（ストーンベア）：ランクB以上の依頼で見かけるモンスター、岩の様に硬い皮膚を持ちながら素早い動きで人を襲う害獸である。

「さすが『旋風』ともなると、ギャグにキレがあるな」

ランクがBにもなつてくると、異名や一つ名をつけられてきたりする。巨大な斧を振り回しながら敵を圧倒するバルカンにぴったりな二つ名だと、ハジメは思つているのだが。

「ガハハハ！やめろい！そんなこつぱすかしい呼び方は！」

少し嬉しいのか耳がピコピコしてるのが外見に似合わず可愛い。

「俺は明日ちょっとゴブリン退治だな。今から準備さ」

「ガハハ！そうか！ゴブリンといえども油断は禁物だな！まあ、主ならば問題ないだろう！ガハハハハハ！でわな！今度飯でもいこうぞ！ガハハハハ！」

のつしのつしとギルドに向かっていくバルカン。冒険者になつて一月ほどこのふる、森でバルカンとは出会つた。詳しくは、見たことないモンスター一体と戦闘中のバルカンと、安全と思つて近くの森に薬草を取りに来ただけのハジメが出会つた。

そのモンスター一体がこつちに気づいて、襲い掛かつてきたので全力で後ろに後退したが、それでも襲つてくるので、誰もいないことを確認しつつ、仕方なしに、本当に仕方なしに魔法を使って倒す。ずいぶんあつさり倒れたことから、ランクCあたりのモンスターかと思い、その後さつきの場所にもどると、斧で倒したのである同じモンスターとバルカンを発見する。さつきのモンスターは、と尋ねられたので、倒したと答えたハジメに少々の驚きの表情で表したバルカン。街に戻るまでには二人は打ち解け、夕食を共にする仲になつていた。その後からか、バルカンが無駄にハジメのことを買つ様になつたのは、当時ハジメはランクE、バルカンはランクBに届きそうなこといつたところで、ランクCあたりのモンスターをランクEのハジメが倒したことを見つけていたのかと思い、特にハジメは何もいわなかつた。魔法のことは内緒にしておきたかったのである。

「エーテン」では魔法は存在する。千人に一人ほど、魔力を持つて生まれる子供がいる。その力の大小はあるが、一般的に魔道士、魔法使いと呼ばれ、ギルドに所属していたのなら、最低でもランクC程度のモンスターなら倒すことができる。魔力を持つものの多くは城に使えたり冒険者をしているが、魔法には条件があつた。その条件は人によつたり、魔法の属性によつて変わるが、ほとんどの人は「魔力を消費する」である。中には、魔力消費が少ない代わりに「寿命を削る」という人もいたり、本当に珍しい人だと、「使うたびに髪の毛が減り、髪の毛の数だけ魔法が使える」という人もいたりするという。この世界では「神の悪戯」と呼ばれる現象であった。

話は変わるが、このハジメという男、そんなに口数が多いことも

ないが、それなりにプライドの高いところがある。理系で、運動は苦手、といったところか。しかし、ギルドでは剣士として通している。なぜか。

この世界に来てしばらくたつたとき、ある事件を境にハジメは魔法を使えるようになつた。しかも魔力消費は限りなく少ない。ハジメ自身に膨大な魔力があるわけではないが、消費が限りなく少ないことを見ると、これはすごいことである。しかし、魔法条件、「神の悪戯」により、プライドの高いハジメは、初めて魔法を使って以来人前で魔法を使うことは滅多なことでもない限り無い。

ハジメの魔法条件。それは、「使うと、ズボンの股間の辺りが濡れる」というものであつた。

冒険一冊目（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
感想等がありましたら、よろしくお願いします。

冒険 | 口述 (前書き)

サブタイトルなんですが、一話一話の」とで、実際の物語の日数とは関係ありません。

「ゴブリン退治の準備を終え、宿に帰る頃には夜になっていた。ベッドに入り、明日に備えて休むことある。その晩、ハジメはこの世界に来たときの夢を見る。

「は？」

「Hテン」での第一声である。

金無し、定職なし、彼女無し。見事に三拍子そろった25歳、それが田中一であった。

残り少ない金で派遣の仕事をこなしつつ、親のスネをかじりつつ生きてきた一、一応定職に就こうと探してはいるものの、妙なプライドが道を阻め、就ける仕事にも就けずにいた。

なんとか面接までこぎつけた仕事が見つかったのは三日前、履歴書やその他諸々を買い込むために百円均一のお店に出かけた帰り。まさに玄関の扉を開け靴を脱いだとして足元が草になっていることに気がつく。

「え？ あれ？」

確かに玄関を開けたよな、と思い振り向く。そこに扉はなく、ただただ森が広がるだけだった。

まったく何が起こったのか判らない状況に、一は混乱するが、十分ほどすると周りを見渡す程度の冷静を取り戻した。

「そりゃ携帯！」

ポケットから携帯を取り出し、誰かに連絡を取ろうとするが、電波を受信していなかつた。その場にへたり込む。手には百円均一で買った菓子パンとジュース、カッターにボールペン、履歴書、自販機で買ったタバコが入っている袋、ポケットにはライターと財布があるだけだつた。

ギャツギャツギャ…と遠くで何かの泣き声がする。鳥だらうか、日本には狼なんかはいないけど、熊ならこる。今出合うと死ぬかもしれないと思った一は、とりあえず身を隠せる場所を探そうと動くことにした。

周りを警戒しつつ森を進む。巨大な木々が当たり一面に広がつており、前に進んでいるのか、後ろ意進んでいるのかまつたくわからない状況。木漏れ日からまだ日が昇つていることは判るが、あたりは薄暗い。

どれくらい歩いたのか、目の前に道らしき跡があつた。獸道のような感じもするが、あきらかに人の手がはいつている。この道を進めば人に会えるかもしれない。希望が見えた一の足取りは軽くなる。それからしばらくすると一本の巨大な木があつた。巨大な、あまりにも巨大な木。幅だけでも三十メートルはあるだろうか。真ん中には人が入れそうな穴があり、奥は見えない。警戒しつつも、一は穴に入る。

「獸臭はしないし…今日はここで休むか…」

あたりの暗さが増したことと、穴の中で野宿することを決める。穴の中は六畳ほどの広さがあつた。本当にただの空洞で、地面も砂だった。

そこらに落ちている枯木を拾い、穴の外で燃やす。履歴書に火をつけて種火にした。

いつ食料や水にありつけるともわからない一は、ちょっとだけパンを食べ、ジュースを飲んだ。

入り口付近に火を持つてきて穴の中に入る。どのくらい歩いたのかわからないが、疲れていたせいか、直ぐに睡魔は襲ってきた。朝起きたとき、自分の部屋で起きることを期待して。

次の日、起きるとやはり穴の中だった。

「マジかよ…」

落ち込んだものの、携帯で時間を確認すると、八時十分になつており、電波は相変わらずなかつた。外は昨日よりも明るく、幻想的な森を照らしていた。

昨日見つけた獣道は太陽の方に向かつてあり、一はその方角に進んでいく。三時間ほど休憩を挟みながらも歩いだらうか、遠くの方で何か音が聞こえた。それは聞き取れない外国語のような音に聞こえた。木の陰に隠れながら音のする方を伺うと、そこには見たことのない生物、否、見たことはあるが、現実には存在しないはずの生物がいた。

ゴブリン…ゲームなどにより見た目は少々異なつたりするが、まさしくゴブリンがそこにはいた。数にして三体。一メートルないくらいだろうか。三体は顔を向かい合つて、会話をしているようだが言葉が聞き取れない。

生睡を「ゴクリ」と飲む音だけが一には聞こえる。なんだこれは?夢

か?と自問自答を繰り返す。焦りが不幸を呼んだのか、『ブロンの一体と田が合つ。

「ギギヤ————」

「ひらを指差し、腰に差していた鎧びた刃物らしきものを取り出す。二体は同時に「ひらに走ってきた。

「ひ……」

背を向けて走る。初めて浴びる殺氣に恐怖しながら、しかし、死にたくない一心で。あれらは己を殺しに来ている。ゲームやアニメではない。現実なのだ。

死にたくない一心で全力逃走を試みるが、これまでまともな運動をしたことのない一の体力は直ぐに尽きた。幸い運動の苦手な一でも振り切ることができたのか、後ろに「ブリンの気配はない。

「はあ……はあ……はあ……」

息も絶え絶えに、木に座り込む。先ほどの恐怖が頭をかすめ、自分の体を恐怖で押しつぶされないように抱く。

怖い……

なんで俺が……

「ひせどになんだ……」

昨日から怒る分からぬことだらけの事態に、誰にぶつけといい

のかわからぬ怒りが、恐怖を通り超え爆発する。

この時、一は少し混乱していたのかもしれない。心のどこかで、まだこれが現実のことではないと、夢の世界のことなのだと考えていた。

足元に落ちていた一メートルほどの枝を拾いあげる。見よう見まねで剣道の構えをとり、一振り。重くなく、軽くなく、ヒュンと木の枝は弧を描く。

「ははつ……初期武器はひのきの棒か……」

自嘲氣味に呴き、来た道を戻る。ゴブリンを探すのだ。

ポケットにはカッターナイフを入れ、残りの物が入った袋はジーパンのベルトに縛りつけた。ゆっくり、気配を殺すように進んでいく。

やたらと喉が渴く。ジュースを一口飲もうかと思つたとき、ゴブリンが二十メートル先に見えた。こちらには気づいていない上、一
体だけだつた。

千尋一週のチャンス一は覚悟を決め ゆくぐりと 後ろから近づく。ゲームと同じなんだと自分に言い聞かせながら。

氣合の叫びとともに「ゴブリンの頭に向かって木を振り下ろす。全力で振った木はゴブリンの頭を捕らえ、嫌な手ごたえとともに半分に折れた。

「ああああああ！……！」

半分になつた木の棒でなんども殴る。絶命の声はなかつた。返り血を浴びたところで我に返つた一は暗い笑いを浮かべた。

「ははっ……なんだ……」

熱いと感じたのはその瞬間だつた。左の二の腕が異様に熱い。否、熱いのではない、痛いのだ。

「があ……！」

叫びながらもその場から慌てて離れる。振り返ると、自分の血がついた凶器を構えたゴブリンが一体、まるで笑っているかのように叫んでいた。

「くそつ……」

痛みで頭がいっぽいになるが、今は目の前の敵を殺すことだけを考えた。木の棒は無い。逃げるときに倒したゴブリンの近くにきてきたのだ・
ポケットにあるカッターを思い出して取り出す。力チカチと、刃を半分ほど出し、ゴブリンに向けた。

ギヤツギヤと奇声を上げながらゴブリンが突つ込んでくる。そんなに早くない。避けられると想い、避けようとするも身体が思うように動かない。刺された痛み、ショック、初めての戦闘で身体が硬直していたのだ。

紙一重で避けることに成功するも、服と腹の皮一枚を切られる。

一の腕の痛みに比べたらそれほどでもないダメージだったが、一は
どうすればいい。どうすればゴブリンを屠れるのか。お互の得物
は同じような大きさ。なら、使い手によつて勝敗は決まる。
怯む。

先に動いたのはまたもゴブリンだった。相変わらず同じ動きで一
を殺しにくる。今度は避けることが出来た一は、地面の砂を握り相
手に投げつける。それがうまいこと目に入ったのか叫びながら目を
こするゴブリン。この好機を逃さないと一は後ろに回り、背中を切
りつけた。

百円均一のカツターとはいえ、なんの抵抗もなく振りぬくことができ
た。

「ギャアアアアア」

ゴブリンが叫ぶとヨタヨタと一緒に背を向け倒れる。しばらくそれ
を見続け、ゴブリンがちゃんと死んでいることを確認した一は、吐
いた。ほとんど胃液だったが、痛みが現実を呼び戻し、生物を殺し
たことに吐いた。

しばらくボーッとしていたが、先ほどの戦闘で仲間が来るかもし
れないと思った一は、どこに進んでいるかもわからないまま歩いて
いった。

■除川口田（前書き）

投稿一話田でお氣に入り一件とポイントがあるのを見て、がらりもなくにやけてしましました。すげく励みになります。ありがとうございます。

ひとつ過去話が長くなつたのですが、おちやかへだてだれ。

カッターで服を切り、へそだしＴシャツを作る。残った布で傷口をきつく結ぶ。痛む一の腕を押さえるようにしていつ抜けるかも判らない森を歩く。思つていたよりも時間がたつていたようであたりは暗くなつてきている。

急いで森を抜けたい一だが、夜ゴブリンにあつたときのことを考えると、どこかに身を隠しておきたい気持ちになる。他のモンスターがないとも限らない。

「くそつ…破傷風とかにならんだろうな…」

刺されたナイフの様な刃物は少なくとも綺麗な物ではなかつた。痛みの他に熱を帯びてきている。手当でが遅れると傷口が腐つてしまつことも考えられる。

不幸に次ぐ不幸を体感した一に、希望の音が聞こえてくる。水の流れる音がするのだ。疲労困憊だった身体は急に元気になり、音に向かつて歩く。

「み…水だ…」

小さな川である。岩から染み出した水が川を作り出していた。ここに来るまでに飲みつくしたジュースのペットボトルで水を汲む。生水は危ないという話も聞いたことがあるが、今の一には関係なかつた。

ペットボトル一杯に入った水を一気に飲む。その味はこれまで飲んだことのない水のおいしさを感じた。

「く……俺は……水なんかで……泣いてるのかよ……だせえ……」

いつのまにか頬を伝うのは涙。痛みではない。生き延びたことがそうさせたのだ。

水を飲んで満足した次は傷口を洗い流す。丹念に洗い流し、巻いていたシャツも綺麗に洗い巻きなおす。痛みは治まつたが、動かすと激痛が走る。思ったよりも深いようだった。

一には一つの希望が見えていた。川である。川沿いに歩いていけばきっと人里にでると。以前読んだ漫画だったのか、雑誌だったのかは覚えていないが、そんな情報が書いてあった。しかし、今日はもう暗い、明日から川沿いをあるくことにした。そうなると寝床の確保だが、水を飲んで休んでいた一に動く気力などは無く、木にもたれかかるようにして眠ってしまった。

水の流れる音で目が覚める。目を空けた瞬間周りを確認する。無事生きていたことに安堵するも、自分の失態に悪態をつく。危険な生物がいたら？毒をもつた虫がいたのかもしれない。そんな中、無防備に寝ていたのだ。昨日のこと、今も痛む二の腕の傷、これが現実であることを嫌というほど認識していたはずなのに。もつと気を引き締めようと立ち上がったところで身体が重いことに気がつく。

「やつぱりか……」

熱が出ていた。原因はわかりきっていた。とりあえず川で顔を洗い、傷口を洗い、シャツを巻きなおした。身体は重いが、希望が見えてきたのだ。川沿いに歩けばきっと人里にでる。それを信じて一は歩き出す。

一時間も歩くと、それなりに川は大きくなってきた。しかし、息

が上がっていた。昨日は二時間ほどあるいていても今より疲れていなかつた。

「熱つて…本当に…体力…なくなるんだな…」

荒い息を上げながら誰ともなく呟く。熱を出したときにはこんなに歩いたことのなかつた一は思つた。これまで薬を飲んで寝てれば治つていたのだ。

もう少し歩いたら休憩しようかと思い、だるい身体を引きずるよう歩いていると、川で何かが跳ねた。一瞬警戒するが、それが魚らしきものだとわかると、一は喜ぶ。魚はちゃんと魚の形をしていて目を凝らすと結構泳いでいた。この三日間を菓子パン一つで過ごし、空腹は限界だつたのだ。しかし釣り道具などあるわけでもなく、どうしたもんかと考える。

「なんだっけ? がちんこ漁…だつたかな…」

岩に岩をぶつけ、その振動で魚を氣絶させる日本では禁止されている漁法である。川を見るが岩はないので、岩を探してうろつりしていると手ごろな大きさの岩がある。少ない体力で川傍まで持つて行き、ズボンを脱ぎ川に入る。膝まである水かさにちょっと驚くが、川の真ん中あたりまで持つて行きその場を離れる。しばらくじっとしていると、岩の周りに魚が集まるのが見えた。もう一つ岩を探してきた一は、十キロはあると思われる岩を持ち上げ投げる。数瞬、大きな音と水しぶきが起つ。水面が落ち着くのを待つてみると、何匹か魚が浮いていた。嬉々として魚を取り、よく洗つたカッターでハラワタを出し、履歴書をまた一枚燃やし、焚き火を起こして魚を焼いた。

塩も何も掛けていない魚の丸焼きを二匹ほど食べ、残つた一匹を

袋に入れ、ペットボトルはポケットにねじ込んだ。休憩もいれ、満腹になつた一はまた歩き始めた。

一時間ほど歩いたどうか、体調は悪化をたどる一方だつた。息が荒くなり、足取りも怪しくなつてくる。朦朧としながら歩いていると、悲鳴が聞こえた。ここからそう遠くない場所で。

三日、ふりに聞く人の声に喜びを隠し切れない一はその場所に向かつて走り出す。朦朧とした意識ではその声が悲鳴だつたということを考えるにいたらなかつた。

side とある母親

熱がある娘に食べさせるために、果実を取りに森の浅いところまで来たある母親がいた。そのついでに、熱を下げる効能のある薬草を摘んでいたときのことだつた。この森の浅いところなら、魔物はおろか、ゴブリンすら出ることはなかつた。…はずだつた。

前の茂みからガサガサと音をだしながら出てきたのは、ゴブリンではなく、もつと絶望に近い魔物であつた。

マンティス…巨大な鎌を武器に襲つてくるカマキリである。それなりに硬い皮膚を持つ、肉食の魔物。ただのカマキリなら怖くはないが、その大きさは人間大であった。キチキチと声のような音をあげながら、じりじりと母親にじり寄つてくる。ゴブリンなら背を向けて走れば逃げれたかもしれない。しかし、大きさの割に意外と機敏なマンティスに背を向ければ背中から切られる。先ほどあげた悲鳴を村の人が聞きつけ、助けに来てくれることを祈るしかないのだが、浅い森とはいえ村までの距離はある。その可能性は少ないだろう。

恐怖のあまり、抜けそうになる腰をなんとか奮い立たせ、ゆっくりとマンティスに視線を置きながら後退する。そこで気がついた。マンティスは手負いだったのだ。頭に一つついている触角は折れ、自慢の鎌は片腕しかなかった。どこかで冒険者にやられたのか、仲間内でなにがあつたのか、いずれにせよ向こうにも弱っていることは確かだつた。

しかし、それが判つたところだ、母親にはどうすることもできなかつた。後ろを見ずに後退していくせいか、トンッと木にぶつかつてしまつ。マンティスとの距離はだんだん無くなつて来る。どうとうあと一歩という距離まで追い詰められ、その片腕の鎌を振り上げた瞬間、パキンという音とともにマンティスの首が飛んだのだった。

- side out -

悲鳴を聞いて、人の声だと喜び勇んで駆けつけてみると、巨大なモンスターがいた。後姿で確証はないが、人間の大きさもあるカマキリだつた。そこでようやく悲鳴だつたなと思い立ち、その先の女性を見る。

人だ。ただ、外国人なのか金髪の髪が見えた。え？ ここ外国？ と考えているうちにその女性は木を背にし追い詰められていた。まずいと思ったときにはもう駆け出していた。ポケットに入っているカッターの刃を全部出し、首らしき箇所を狙う。一番細かつたからだ。

鋭い刃物だつたことが幸いした。熱で声を出すのもきつかったことが幸いした。手負いで触覚が折れていたことが幸いした。いくつも偶然が重なり、本来ならランクCに位置する魔物マンティスは絶

命の声をあげることなくそのまま倒れた。

倒れたマンティスに視線をやり、それから折れたカッターを見て、最後に驚く女性を見て、一は意識を失った。

- side とある母親 -

田の前で青年が倒れて行く。マンティスの首が飛ぶところから、青年が倒れるまで瞬きすらしなかつた女性は、じさつといつ音にはつとす。呼吸が荒く、包帯らしき箇所からは血が滲んでる。

「いけないわ……誰かを呼びに……」

と思つたところで、マンティスの屍骸が田に付く。まだ仲間がいるかも知れないと思つと、この命の恩人をおいて村まで助けを呼びにいくことなどできず、母親は困っていた。結局、青年の肩を抱き、一厘三脚のような形で引きずるように歩く。幸い青年は男性にしては線が細かつたので、女性でもなんとか運ぶことができた。

しばらく歩き続け、遠くに村の入り口が見えたとき、異変に気づいた村の人が数名駆けつけてきた。

「どうしたーイリスー！」

そうやって声を掛けってきたのはイリスと呼ばれた母親の昔なじみであるアインであった。アインは村の警備担当で、この時間は門の警備だったようだ。

「魔物に襲われていいところを助けてもらつて……それよりもすこい熱があるのー早くカディナさんの所にー！」

魔物に襲われたところに驚きもしたが、それよりも普段はお

つとりしていいるイリスの剣幕に、AINは慌てて青年を担いでカデイナの元に急いだ。それから慌しく治療が行われ、ことの始終を村の長老やカデイナ、AINに話したイリスは、しばらく青年の様子を見た後、カデイナに大丈夫だからといわれ、娘のことも心配なのでその場を去つた。

家に帰ると、帰りの遅い母を心配したのか、熱がある娘がテーブルの上で眠つていた。娘を抱き上げ、ベッドに連れて行き、食事の準備をする。材料にとつてきた薬草も加え、そろそろ料理が完成するころに娘が抱きついてきた。

「遅くなつてごめんね? アリス…」

「ん…」

ぎゅっとしがみつく様に母親に抱きつく娘を、母は優しく抱きしめ、「ご飯にすることをつげ、料理に戻つた。

アリスはお皿を並べ、数分後にはおいしいご飯を満足そうに食べていた。もともとあまり話すほうではないアリスだが、食事のときに母親から魔物に襲われたことを聞くと、さすがに驚き慌てた。逆に襲われた母親はおつとりと「ほら、怪我もないわ」とのんびりとしていた。

「でも」

と二人の優しい親子が心配したのは、傷つき、倒れた青年のことだった。

田を開けると知っている天井だった。いつもの自分の部屋。母親がいつの間にか片付けたのだろうか、部屋は綺麗だった。何してたんだっけ?と思い、ああ、今日も特にすることはないんだった。といつもの日常だと思った。

「――双葉―朝」はんよ――」

母親の声が一階から響く。ずいぶん久しぶりに聞いたような気がするのは気のせいだろうか。わかった!と声をかけ、下に降りて行く。隣の部屋にいる妹の双葉が出てこないので、またゲームでもやつてるんだろうなと思いリビングに向かう。すでに準備されている食卓に座ると、後ろから母親が双葉は?と声を掛けってきた。

「ああ…まだ部屋にいたと思つよ。ヘッドフォンしてゲームでもじてるんじゃないかな」

と母を見る。それは、醜悪な顔をしたゴブリンだった。

「ああああああああああ――」

驚き、慌てて一階に駆け上ると、

「どうしたの?」

と双葉の声が聞こえる。しかしここは、母と同じ顔をしたゴブリンがいた。

「ああああああああ！」

絶叫とともに起き上がる。息が荒い。混乱する頭を、落ち着け、落ち着けと何度も心の中で繰り返す。夢だったのだ。しかし、しばらくはゴブリンの顔が脳裏から離れなかつた。

「大丈夫かね？」

そう声を掛けたのは、四十台だらうかと思われる女性だつた。明らかに日本人ではない顔立ちから数瞬思考が止まるが、聞こえてくるのは日本語だつた。

「え？ あ…はい」

しじろもじろで答えると、女性はニヤリと笑い、怖い夢でも見ていたのかい？ ボーヤ。といつてくるが、不思議と嫌味には聞こえず、ええ、まあ。と答えるまでだつた。

「あたしや、カティナ。この村で医者の真似事なんかやつてこる。自分の名前を言えるかい？ 記憶がなくなつてたりは？」

「いいえ… 記憶はあります。俺は… 田中一といいます」

「そうかい。記憶はあるかい。そいつはよかつた。にしても、タナカハジメ… 変わった名前だね」

女性が勘違いをしていることにすぐに気がついた一は、名前が一で、苗字が田中であることを伝える。どうやらアメリカ風に苗字が前に来るらしい、ならばやはり海外なのか？ と一は考える。玄関を開けると海外… なんだそりや。と自問自答していると、女性が話しかけてきた。

「じゃあハジメ、現状を伝えるよ。まずはイリスを助けてやつてくれたそうだね。ありがとよ。危つくあの娘のパンケーキが食べられなくなるところだつた」

イリスというのが、巨大カマキリに追い詰められていた女性だと気づくと、ハジメは彼女が助かつてよかつた…と安堵した。

「いえ、あの女性が助かつてよかつたです。それにたぶん、俺も助けてもらつたんでしょうし…」

治療された後が見える自分の身体を見て思う。あの場には彼女しかいなかつた。彼女がきっと助けを呼んだりして自分を助けたのだろう。

「よくそんな身体でマンティスなんて倒せたね?どこかのギルドに所属している冒険者かい?それよりもその傷、もう少しでやばかつたね…腕がなくなるところだつたよ」

と、物騒なことをいいつつも、ニヤリと笑う。おそらくはそれがデフォルトの笑い方なんだろうと決め付け、ハジメはまた思考の波に飲まれた。

マンティスというのはおそらくあのカマキリのことであろう。それにしてもギルド?冒険者?いつたいなことだ?と、考えにふけっていると、

「カディナさん、いませんか~?」

という声が聞こえてきた。

「おやおや……噂をすれば… イリスが来たみたいだね。入つておいで！」

と玄関先にいるであらうイリスに声をかける。お邪魔しますといふ声と足音が聞こえてくる。あのとき助けた金髪の女性は、近くで見るととても綺麗な顔立ちだった。

「カティナさん、彼、田が」

といつたところで、ハジメはイリスと田が会う。じばらく両者が止まつていると、やつき田が覚めてね、とカティナがイリスに伝えれる。

やつだ、お礼を言わなきや、と思つていたといふに柔らかくていゝ匂いのする何かが身体を抱きしめた。

「え… ょう…」

イリスがハジメを抱きしめていた。田には涙をため、抱きしめる腕は少し震えていた。涙声で、何度も良かつた、といつており、それを聞いたハジメは、何も言えず、抱きしめ返すことも出来ず、ただ呆然としていた。

じばらくして、ニヤついて見ていたカティナがよつやつと助け舟を出す。

「ほりほり、イリス、彼が困つてゐるだ」

そう言われて、ああ！飛び退く。少し残念だつたな、と思つていると、それを見透かしたようにカティナがニヤついてくるので一瞬で直した。

「『J...』めんなさい。嬉しくて…」

と、まだ目に涙をためて『J』イリスはとても綺麗で、ときめいたのは秘密である。

互いに自己紹介をし、お礼合戦を始めたところでカディナが今日のところは、と、イリスを家に帰す。とりあえず一、三日はここで休めと言われ、ハジメは言葉に甘えることにした。考えることは山のようにある。それらを冷静に処理するために、カディナの好意はありがたかった。痛み止めや可能止めの薬を飲むと、程なく眠気が来てとりあえず身体を休めることにする。

次の日から情報を集めるために動く。といつても精々カディナやイリスとの会話をするだけであった。本を見たのだが文字が読めなかつた。アルファベットでもない文字で書かれたそれは、今まで見たことも無いものだつた。

すっかり身体の調子も戻り、傷も痛むが行動に支障がないほど回復した。

これまで集めた情報を考えると、ここは日本ではなく、少なくとも地球ではないことが判つた。集まつた情報はすくないが、『魔法』といつものが存在することを聞いたとき、それは確信に変わつた。

『魔法』『魔物』、この世界に存在し、地球ではありえない空想の話。しかし、これが現実であることを嫌といつほどじつっているハジメは、納得するしかなかつた。

果たして自分の世界に返れるのか、と悩む前にもつと切実な悩みが出来てしまつた。カディナが、退院しても良いというのだ。治療費はいろいろとまでいってくれるのは大いに助かるのだが、この世

界のことをほとんど知らないハジメにとつて、ここから出ることは大変厳しかった。かといってこの村にいきなり住めるものなのか考えてみると、ちょうどイリスが見舞いにやってきた。彼女は毎日見舞いに来てくれていたのだ。

退院できることを告げると、彼女は自分のことの様に喜んだ。イリスに娘がいる話を聞いた昨日は驚きのあまり大声を上げてしまつたが、目の前で無邪気に喜ぶイリスを見ていると、とても人妻とは思えなかつた。

お礼もしたいし、娘にも会つてと言われたので、悩むまでも無く好意を受けた。これで一泊考える時間が増える。と少し邪な考えもあつた。カティナにお礼を言い、これからイリスの家に行くことを告げると、いつものニヤリとした顔で、

「元気になるやつがあるので……飲むかね青年」

と耳元で言われたので、丁重にお断りをした。

「お…お邪魔します」「はい、いらっしゃいませ」

程なくしてイリスの家についたハジメは、つやうやしくその玄関をくぐる。レンガと木材でできた家は、まるで中世の欧洲のようだつた。

娘を呼んでくるから、とハジメをテーブルに座らせ部屋を出て行くイリス。その姿を見送った後、ハジメはこれからのことを考える。目標はもちろん日本に帰ること。その為の方針としてこの世界に来た原因を調べないといけない。しかし、この世界のことも知らず、先立つものすらないハジメには調べることができない。したがって、ハジメがすべきことはこの世界での生活手段を探すことであった。

「この世界でも無職か…」

ポツリと呟く。日本でも無職、この世界でも無職。自分が情けなくなり、落ち込みそうになっていたときにイリスが帰ってくる。後ろには水色の長い髪を両端でくくっている可愛らしい子供が、母親に隠れるようにしてこちらを伺つていた。

「ハジメさんのおかげで熱もすっかり下がったの。娘のアリスよ。

ほら、アリス」「…アリス…です」

イリスに背中を押されながら前に出たアリスは、小さな声で名前を言つと、すぐにイリスの後ろに隠れてしまった。む、この年頃の娘はシャイなんだな、と無職の男は考え、

「ここにちはま、アリス。お…私はハジメといいます」

「」の年頃の女の子とともに話したこともなく、なるべく丁寧な挨拶を心がけたハジメは出来るだけの笑顔を造つて見せた。しかし、アリスの反応はいまいちで少し落ち込んだ。

「はい。それじゃ、お皿にしましょう」

嬉しそうにぱちっと手を合わせてアリスが言つ。これ以上何を話したらいいんだと思つていたハジメは、助かったと思つた。しかし、そう言つて料理を作り始めたアリスとは別に、自分の向かいの席にちょいこんと座るアリスがいた。

気まずい、これは非常に気まずいぞ。とハジメが冷や汗をたらしていたとき、やつと聞こえるような大きさの声でアリスが話しかけてくる。

「あの…」

それを言つたきり、しばらく俯いて話さない。それを見てイラッとするハジメではない。どうしたんだい？と優しく声をかけ、アリスが話すのをじっと待つ。時間にして三分钟左右か、じつと下を向いていたアリスが、意を決したようにこちらを向き、赤くなつた顔で、小さな声で、しかし、はつきりとした口調で言つ。

「お母さん…助けてくれて…ありがとうございます」

それはお礼の言葉。あまり人と話すことに慣れていないのか、アリスはまたすぐ下を向いてしまつ。お礼を言われると思わなかつたハジメは少し驚いたあと、今度は心からの笑顔で、

「うん、どういたしまして」

と、答えた。それから一人はぼつぼつと、料理ができるまで何気ない会話をしていた。

お昼をご馳走になり、熱湯を治つたが、まだ体力の戻らないアリスは部屋で休むといい、イリスと部屋を出た。一人になると、これらどうしようとまた考え始める。生きていくためにはやはりお金が必要である。地球でないこの世界で、財布の中の金は使うことはできないうだろう。大学まででた学歴があるが、無職のハジメには特殊な技術があるわけでもなく、パソコンの無いこの世界では、彼の持っているスキルも活かせない。いかにしてお金を稼ぐか。そう悶々と悩んでいると、イリスが帰ってくる。

「『じめんなさい、アリスを寝かしつけていたの』
『いいえ、いいですよ』

食べてすぐ寝ると健康に悪いですよ、と思つたが、とりわけ言うことでもないと思い、胸のうちに隠した。

「アリスが知らない人とあんなに話すのは初めてのことだわ」

と嬉しそうに言う。あんなに話すといつても、ハジメにとつてみればとても少ない会話であつた。しかし、嬉しそうなイリスの顔を見ていると、本当にシャイな女の子なんだな、とアリスに対してもう。

「ハジメさんがあの時助けてくれなかつたら、アリスとこいつでご飯を食べる」こともできなかつたのね…ハジメさん本当に」

といったところで、ハジメはその言葉をさえぎる。このままではまたお礼合戦が始まってしまうからだ。

「ああ…あの、イリスさん、旦那さんはお仕事ですか」

そう聞いてみた。毎日見まいに来てくれてたときから思つていたことだが、旦那に悪いな、と。それを聴いた瞬間、ハジメは自分が地雷を踏んだことに気がつく。いつも笑顔でいたイリスの表情が少し悲しげになつた。

「アリスは…私の娘ではないんですね」

しまつた。と、とつさに思つたハジメは慌てて誤ろうとするが、いいえ、と言葉を逆にさえぎられ、聞いてくださいとお願いされた。アリスは、イリスのお姉さん夫妻の娘であり、まだ赤子だったアリスを残して病で亡くなつたこと、そのことをアリスは知つてていることをハジメに告げた。しかし、娘を思い、薬を取りに行つた母親、今、自分にお礼を言つた娘。一人を見ている限り、お互ひを思いやつている親子にしか見えない。そのことを伝えると、少し赤くなつた顔で、先ほどとは違つたありがとうを言われた。

「ハジメさんは、どこから來たんですか」

来た、來てしまつた。この質問が、心の中でハジメは悩む。本当のこと話をすべきなのか、と。

あまりかみ合わない日常会話をしていたときにされたこの質問、入院していたときは、ハジメに氣をつかつてかハジメに関する事を聞いてこなかつたイリスだが、ふと気になつて尋ねてみのだ。しかし、急に会話の止まつたハジメを見て、聞いてはいけないことだつたのかと思い、あせる。一人して会話がなくなつた頃にハジメは

決心した。

「イリスさん、これから話すことは…信じられないことだと思つんですが、聞いてください。俺は」

違う世界からいつの間にか来てしまったこと、着てからのこと、これからのこと、それらを休み無く話していく。三十分は話しだだろうか。出された水を飲む。しばらく黙つていたイリスがまじめな顔をしてこちらを見る。不審がられただろうか、怒らせてしまったのだろうか、怖がられてしまつたのだろうか、いきなり私は違う世界から来ました、なんで日本にいたときに自分が言われたのなら、まずそいつの頭を疑う。少なくともハジメならそうした。しかし、イリスの口から出た言葉は、ハジメの予想を超えていた。

「だったら、しばらく家に住んでください」

「真面目な顔から一転、いいこと考えたわ、と言わんばかりの笑顔で、癖なのか手をパチッと合わせハジメに言う。ハジメにとつては願つてもないことだが、ちょっと待てとも思つ。この女性、危うい」と。

「ちょっとイリスさん、いいですか。その提案は俺にとつてはすぐ助かります。嬉しいです。違う世界から來たことも信じてくれたことは非常にありがたいですけど、ちょっと無警戒過ぎます。もしこれで俺が危険な人物だつたらどうするんですか！それに女性だけの」

ハジメの説教が始まった。ハジメは、イリスにとつて命の恩人だが、ハジメにとつてもイリスは命の恩人だつた。そんなハジメは、恩人がこんな性格なことに危機感を覚え、柄にもなく説教していた。

しかし、終始笑顔のイリス。聞いているのか聞いていないのかわからない。

「聞いてるんですか！イリスさん！」

と、少し強めの口調で言つと、ハジメさんだから言つてるんですよ。といわれた。ぐうの音もでないと今はハジメのことと言つのであります。そんな殺し文句を言われては、もう黙るしかなかつた。お世話になります。トイリスに伝えると、部屋を一つもらつた。娘と一人暮らしをするには広いんですよ、と笑顔で言つイリスに、ものはや何も言えなくなつた。それからじめらしくしてイリスは、夕飯の時間までは、自分の好きにしてください。私は長老に伝えてきますので、と言つて家を出て行つた。

もひつた部屋はつかつてなかつたと言つ割りに手入れはきちんとされていていた。この家はもともとイリスのお姉さん、アリスの本当の両親のものだつたらしく、お互ひ天涯孤独になつてしまつたのを見て、長老が、親子になり、そこに住めと提案したとハジメは聞いていた。

ベッドに寝転がる。この世界に来てからのこと振り返る。今まで生きてきた25年の中で一番濃い時間だつた。これからもやうなるのだろうか、と多くの不安と、ほんの少しのドキドキを胸に抱えながら、ハジメは眠りについていた。

ゆさゆさと身体が揺れでいる。きっと双葉が自分を起こしているのだろう。そう思いながら、後五分、と伝えると、小さな声で答えたが返ってきた。

「…だめ、『ご飯でてる…』

その声に反応して、ガバッと起きる。急に起き上がったことに驚いたのか、キヤッと可愛らしい悲鳴が聞こえた。

「「J...「Jめん！大丈夫？」
「ん...」

大丈夫、と言つアリスはもう一度ご飯できてると伝えると、ハジメの手を引いて食卓へと向かう。寝すぎたな、と思ひながらもハジメは引かれる手を見ながら笑顔になつた。双葉も昔はこんななんだつた、と懐かしむように。

手をつないで登場した二人に少し驚いたイリスは、あらあらと笑顔になり、お昼よりも少し豪華な食事をお皿に持つてゐるところだつた。

「すみません、いつの間にか寝てしまつていて...」

と詰つと、いいんですよ。それよりお腹すいてますか、と帰つてきた。さつき食つたばかりだけどなつたが、どれくらい寝ていたのか、腹は減つっていたので、ペコペコですと伝えると、シチューのやうなものをたくさんよそつてくれた。

食事はとてもおいしく、森を彷徨つていたときに食べていては比べ物にならなかつた。おいしいおいしいとばくばくと食べていると、やつぱり男の人は食べるのね、とイリスがいうので、少し自重するべきだつたか、と反省した。

お昼のときよりも会話は弾み、アリスともなかなかに話せたハジメは、今日から家に厄介になることを伝えると、もう知つていると答えた。イリスはすでに伝えていたのだ。これからよろしくと伝えると、ん...と相変わらず小さな声で答えた。

食事が終わり、明日長老のところに行へことになつたことをハジメに伝え、イリスはアリスと共に寝室に行つた。まだ眠たくないハジメは静かに外に出た。

街灯などが無いこの村では夜空の星が夜の光だつた。満点の星空など、日本にいたときには見たことなかつた。三つある月が明らかに地球じゃないことを示していて驚いたが、それももう、どうでも良くなつてきた。今更じたばたしてもしかたない。そう思つてしまらく夜空を見上げていたが、また眠くなつてきたので、今日はもう寝るか、と部屋に帰つていつた。

冒険五日目（後書き）

と、から始まる文章が多いですね。違和感を感じない程度に気をつけたいと思います。お気に入り件数や、評価点、ユニークアクセス数が増えてきました。

大変嬉しく思っています。ありがとうございます。

窓から差し込む光が、朝が来たことを知らせる。昨日の夕方に寝てしまつたせいか、早く目が覚める。朝五時くらいだろうか、と考えたところで、ハジメはこの世界の常識をまだ聞いていないなと思う。通過、時間、日…すべてを話したイリスにならこれらのことを見けるだらうと考え、勉強しないとなと思う。

十分ほどボーッとしていると、遠くにぼつぼつの人気が見えてきた。農家の人がどううか、道具らしきものを背負つてどこかに出かけて行く。そういうえば、今日長老のここに行くといつていたな、と思いにふけつていると、妙な匂いがする。匂いというよりも臭い。窓を開けているわけでもないし、部屋の扉が開いているわけでもない。などのつまり、ハジメは臭つていた。最後に風呂に入ったのはいつだつたか、少なくともこの世界に来てから、精々足に水が浸かつだけであった。

この臭い持つて長老の所へ行くのはまずいと思つたハジメは、風呂に入りたいと思う。しかし、この世界に風呂はあるのだろうかという疑問が残る。とりあえず部屋から出て、音を立てないように風呂を探し回る。これでは泥棒と変わらんななどと考えて探すこと五分。見つからなかつた。しかたなくタオルで身体を拭くことにしたハジメは、外にある井戸に向かつた。タオルや服はイリスから借りていた。男物の服は、イリスの姉の旦那の者らしく、着る人もいませんから、と言わされたので受け取つていた。

カティスのところで気がついたときには入院服の様な服に変わつており、元の自分の服がどうなつたのか、あとで聞きに行こうと考えた。財布や携帯が入つていたからだ。井戸で水を汲み、桶に移し自分の部屋に持つてくる。タオルに水を浸し、裸になり身体を拭く。春っぽい季節とはいえ、朝の井戸水は冷たく、声を出しそうになる

が、我慢しながら身体を拭く。しばらく「ゴシゴシ」と拭いていると、二の腕を見る。あれだけ深かつた刺し傷がすでに傷跡になりかけていた。治りが早すぎると思ったハジメは、もしかしてこれが魔法なのか、と思つ。

「また…傷跡が増えたな…」

そうポツリと呟いた。少し雰囲気を作つて言うハジメの背中には、無数の切り傷があつた。その傷はまるで刃物で切り刻まれたようなもので、背中いっぽいに広がつていた。格好をつけてながらも、ゴシゴシと下半身を拭いていたハジメだが、この傷は大学時代にマッシュサイエンティストになるとこなる遊びをしていたとき、何と何を混ぜたのか、怪しい煙を出し始めた。慌てたハジメは窓の外にそのビーカーを放り投げると、突然爆発し、窓ガラスが背中に無数に突き刺さり、傷だらけになつたという、実にくだらないものだつた。

「若かつたな…」

などとほざきながら足を拭いていく。若くもなんともないただの無謀だつた。

全身を拭いて終わり、トランクスっぽい下着を穿いたときだつた。コンコンとノックをした後、ドアが開く。扉に背を向けながらハジメは思つ。カギないしな…と。

「ハジメさん…起きてま…」

ガチャリとドアを開けて入つてきたのは、イリスだつた。トランクス一丁の男が首だけ振り返ると、目が合い、時が止まつた。

イリスの朝は割かし早い。朝ごはんのしたくに洗濯物、それらを早くに終わらせないと、朝の仕事に間に合わないからだ。それに今日はハジメを長老の所に連れて行く用事がある。それを考え、いつもより早くに目が覚めたイリスは、隣で眠るアリスを起こさないようにベッドから出る。向かいの部屋からゴソゴソ聞こえるので、ハジメさんは朝早いのね、などと考へ、井戸水を汲み、流しに運ぶ。顔を洗つたところで、ハジメに井戸の場所を教えたが、井戸の使い方を教えてないことに気がつく。

違う世界から来た。という話を聞いたとき、初めは信じられなかつたが、かみ合わない話や真剣な表情を見ているととても嘘をついているようには見えなかつた。どんな世界から来たのかは聞いてないが、もしかしたら井戸の使いかたを知らないかもしないと思つた。早いうちに教えなきやと思つたイリスは、いそいそとハジメの部屋に向かう。扉をノックしよつとしたところでハジメの声が聞こえた。

「また……傷跡が増えたな……」

小さな咳きだつたが、閑静な朝の空氣はその音をはつきりと運んだ。一の腕の傷のことを言つてゐるのだろう。それを聞いたイリスは申し訳なく思つ。自分を救うために人が傷ついたのだ。優しい彼女が自分を責めないはずはない。少し悲しげに聞こえた声を聞き、イリスは扉をノックすることをためらつた。しかし、すぐに次の言葉が耳に届く。

「若かつたな……」

その口調は、先ほどとは違つて楽しそうな、面白いことがあったような口調に聞こえた。

「どうじうことだろ？。」イリスは悩む。私を助けて、傷が増えて、若かつた…三つのことを考えていると、イリスに一つの答えが浮かぶ。もしかして、ハジメは歴戦の戦士ではないのか。「彼女を助けられたのはいいが、あの程度の敵に傷を負つてしまつとは、俺も若いな」と言う意味ではないのかと考えた。

マンティイスを一撃で両断したとき、手に持つていたのはナイフよりも小さなものだった。あんな大きさで、マンティイスを一撃で倒す小さなナイフをもつてているのは、この世界でも名の知れた冒険者だけだ。つまり…と思いつく。イリスは少し元気になる。本当にイリスを攻めているわけではなかつたのだ。これまで話をってきてイリスはハジメに好印象をもつっていた。身体の線こそ細いが、丁寧な口調、落ち着いた雰囲気、何より人見知りなアリスが懐いている。年は私よりアリスが近いかもしれない…などと思いながら、笑顔になり、ノックしつつドアを開ける。

「ハジメさん…起きてま…」

そこまで言つて目にした光景に、イリスは止まつてしまつ。トランクス姿のハジメが立つていることも驚いたが、ハジメの背中には無数の傷跡があつたのだ。一つや二つではなく、何十という。その光景に何も言えなくなつていると、

「あーすみません、イリスさん。凝視されると恥ずかしいのですが…」

と少し苦笑いをしながらハジメが言つてくる。そのときになつてようやくトランクス姿だったということを思い出し、顔を赤くして

後ろを振り向く。

「す……すみませんっ……井戸の使い方を……教えよつかと思いまシテ……」

尻っぽみになる自分の声を少し情けなく思いながら、イリスは傷のことを考える。いつたいどれほどの戦いを潜り抜ければ、あれほど傷がつくのだろう。自分の考えは間違つていなかつた。ハジメは異世界の戦士だつたのだ。イリスの結論だつた。

「ああ、井戸の使い方なら判ります。今水で身体を拭いていたんですけどよ」

振り返るときに田に入つたのは、確かにタオルと水の入つた桶であつた。ハジメの世界にも井戸はあつたらしい、と考え、直ぐに食事の準備をしますから、といつて部屋を出た。少し冷たい言い方に聞こえたかも知れないと思つたのは部屋を出て直ぐだつたが、それよりも、イリスは別のことを考えていた。

- side out -

食事の準備をするといつて部屋を出て行くイリス。若い女性にトルンクス一丁の男の姿は目の毒だつたか、などと考えながら、もはつた服を着る。綿よりも麻に近い少し硬い素材の服だが、風通しがよく、水で拭いた身体には丁度良かつた。

身体を拭いた水をどうすればいいのかわからないのでイリスに聞こうを部屋を出ると、丁度アリスも向かいの扉から出てきた。

「おはよー、アリス」

「ん…おはよー」

まだ少し眠そうなアリスは寝癖をつけながら皿をこすっていた。双葉にもこんな時代があつたなーと今は遠い昔を思い出しながら、アリスの頭を撫でる。無意識に撫でていたため、しまつた一年頃の女の子に…と思いつつと手を引く。

「あつ…」

とアリスが名残惜しそうに咳くがそれはいつもより小さく、ハジメの耳に届いてはいなかつた。そうだ、とハジメはアリスに身体を拭いた水をどうすればいいかを尋ねた。アリスは、ん…と言つとハジメの手を引いて家の外に出る。家の裏に排水口のような穴があり、そこに水を捨てる教わつた。アリスに例を言い、水を捨てる。丁度そこでイリスに食事が出来たと言われたので、少し早めの朝食を取る。

朝の仕事に言つてくるといつて出かけるイリスを見送り、部屋でじろじろしていると、ノックが聞こえた。どうぞと声をかけるとアリスが入つてくる。アリスが部屋を訪ねてくるのは初めてのことだつた。

「どうしたの？」

とたずねても、下を向いて何も答えない。どうしたんだろうと思つて、ベッドに腰掛けたハジメは、隣をとんとんとたたき、おいでと言つと、アリスは少し嬉しそうに顔を上げ、ハジメの膝の上に座つた。

あれ?とハジメは思う。隣に…とこつこつだったのだが…まあいい

が、と思案を終わらせ、やつ一度ビリしたのと聞いた。

「お母さん、いないから…」

近くにいても小さな声は、悲しげだった。つまり、寂しかったのだ。イリスの話では両親が亡くなつたことも知つてゐるといつ。もしかしたら父親が恋しいのかもしれない。と思い、ハジメは切なくなつた。

「よし、じゃあ遊ぼうか…」

と少し元氣ずけるように大きな声で言つて、アリスはまたほんの少し嬉しそうに、コクンとうなずいた。

遊ぼうか、と行ってみたものの、この年になつてハジメはこんな小さな女の子と遊んだとこはない。妹の双葉と遊んだ記憶などほとんどないし、どうしていいかわからなかつた。

「えーっと、アリス？」アリスは普段何をしてるの？

何をしていいのか判らないハジメは、とりあえず情報と、アリスに尋ねてみる。

「こつもは…本…読んでる。たまに…」

やう言つて言葉を濁す。言葉の続きが気になつたハジメはじつと黙る。アリスはそれを言おつか言わないか悩んでいるようにも見えたが、決心したように呟く。

「たまに…魔法の練習…」

今、なんと言つたか。ハジメは言葉の意味を半数する。魔法。これが違う世界と認識するきっかけになったファンタジー的要素。しかし、カティスやイリスの話によると魔法を使える人は少なく、とても貴重な力だと聞いていた。

「え……ま……魔法使えるの……？」

少し声を大きく出しすぎてしまつたのか、アリスが少し驚いたようになっていたので、『めんと誤つてもう一度聞く。コクンとうなずいたアリスはこぢりを見て、

「……秘密……」

と言つた。誰にも言つなといふことだらうか、ハジメが確認するど、コクンとうなずく。しばらくアリスの話を聞いていると、秘密にするといつた理由がわかつた。

アリスが魔力を持つことがわかつたのはアリスが赤ちゃんのころだつた。アリスの両親が泣いているアリスが泣きながら無意識に魔力を放つていてことに気がついた。イリスやイリスの姉の祖父が魔術師だつたらしく、アリスの母親はそれが魔力だと直ぐにわかつた。魔法はすばらしい力でもあるが、同時に恐ろしい力でもある。それを知つているアリスの母親はそれを黙ることに決め、ベビーシッターを頼んでいたイリスにも伝えた。魔力を持っているとがばれ、貴族や国に目をつけられると、最悪連れて行かれる可能性があつたからだ。それを両親がなくなつたあと、イリスから告げられて、今では暇なときによつそりと練習しているといつ。

「でも……そんなことお……私に話しても大丈夫かい？」

俺と言いそうになるのを慌てて直すと、普通でいいと言われた。
無理に変えていたことに気づかれてたこともショックだが、小さな
女の子に気を使われたのもショックだった。

「ん…ハジメ…は、大丈夫」

冒険六日目（後書き）

あれ？（。 。 H 。 0 ） . . .

話せんぜん進まない . . . のんびり話とこいつことで . . .

冒険七日目（前書き）

プロット…などなく、その場その場で考えているので、変な話が多いかも知れません。

魔法、それは空想の力。それは奇跡。それはあつてはならない力。すくなくとも科学万能の世界で生きてきたハジメにとつて、魔法は漫画やアニメの中での力だった。手のひらから火を出す。水を操る。雷を落とす……など、ゲームではおなじみの力。しかし、モンスターに襲われ、怪我まで負つたこの世界、ここでは魔法は存在し、この日の前の小さな女の子が使えるというから驚きだ。

魔法が使えるとカミングアウトしてからすでに十分。動かなくなつたハジメをどうしたのかな、と思いながらもアリスはじつと待つていた。ようやく思考が落ち着いてきたハジメはアリスにお願いをしてみる。

「あー……アリス君、その……魔法を見てみたいのだが……だめ……かな？」

なぜか口調が変になつてしまつたハジメに首をかしげながらもアリスは「ぐんとうなづく。

「ん……」

と人差し指を立て、集中するようにアリスが何かを唱え始めた。すると小さな火が指先に灯る。マジックではない。魔法である。色々な視点からそれを興味津々で見ていく。まさしく魔法であつた。

「これが……魔法……」

感動しているハジメに、アリスは少し気を良くしたのか、火の大

きさを大きくしていく。火が十センチほどのボール上になつたとき、アリスが口を開く。

「私は…火の属性だから…火が得意…」

そういうて指先の火を小さくしていき、火は消えていった。まだ魔力量はそんなに多くないらしく、長時間使うと熱が出てしまうと説明を受ける。先日までの熱はそのためなら、無理をさせてしまったなと反省するハジメだった。

アリス先生の講義を受けたハジメは、ある程度の魔法に対する知識を手に入れた。要約すると、魔力を持つ人には、それぞれ属性があり、それぞれの属性にあつた魔法を使うことが出来るとのことだつた。一人の人間が、二つ以上の属性を持つことはなく、一人一系統だという。火、水、土、風、これらの四大属性の他に、闇、光、雷などがあり、滅多に現れない属性だという。四大属性にも偏りがあり、魔力を持つものの五割が火、二割が風と土、残りの一割が水だという。それぞれの特徴を挙げるのならば、火と風は攻撃に、土は守りに、水は回復に適している魔法が多い。特に水の属性を持つものは数が少ない上に回復が出来ることで大変貴重な属性であり、仕事に困らないとのことだった。

ハジメが訳すると十分ほどで終わる説明も、アリスのポツポツとした説明ではおよそ一時間かかったことは、『愛嬌だらう。

魔法の講義が終わることには、アリスが帰ってきた。お昼を一緒に食べ、一緒に行きたいというアリスを引き連れ、長老の家に向かう。その途中でアリスが魔法を使えることを教えてくれたことを伝えると、驚いた後、ややあつてにつこりと笑い、アリスを優しく撫でた。その姿を後ろから見ていたハジメはあつたかな気持ちになり、親子など、血のつながりではないな、と思っていた。

長老の家では、イリスが話を通していたおかげか、すんなりと話は進み、見事イリスの家への居候が決まった。異世界から来たことなどは伏せておき、魔物との戦いで記憶をなくし、森を彷徨つていたところ、イリスを助けることになった、という筋書きになった。

帰りにカティナの診療所による。自分の持ち物は捨てたのかとたずねると、一応とつてあるとカティナは答えた。一応とはどういうことだとたずねたところ、

「白い袋みたいなのに入つてた魚、ありや腐つてたから捨てたけど、いるの？」

ヒジト田で見られた。どうやらかなり臭つたらしい。すぐさま土下座しそうな勢いで誤り倒す。まあいいけど、といい、カティナは服とズボン、財布と携帯と折れたカッターをもつてきた。

「これで全部だろ？ 申し訳ないけど中身を見させてもらつたよ。見たこともない通貨だつたね。しかもかなり精巧な。どこの国の中のだい？」

少し疑うように聞いてくるカティナ。さて、どうやって「まかすかと悩んでいると、イリスから助け舟が入る。

「昨日そのあたりのお話を少し聞いたわ。カティナさん、今はそつとしてあげて。今長老様の家にいって、私たちと一緒に暮らすことになったわ。いずれハジメさんから話してくれるはずよ」

そう言つてイリスはカティナを諭す。イリスには弱いのか、カティナは、いつか教えなさいよ、と笑い奥に引っ込んだ。イリスにお礼を言い、アリスと三人で家に帰る。その帰り道、父親に肩車をさ

れてはしゃいでいる親子をじっと見ていたアリスに気づく。ハジメは体力や筋力に自身はないが、小さな子供くらいなら持ち上げられるだろうと思い、よし！と気合を入れアリスを後ろから一気に抱き上げ、肩車の体勢へ持っていく。可愛らしい悲鳴が聞こえたが、すぐに何をされたのかわかったアリスは、少し照れたように笑った。少し歩くと、恥ずかしかったのか、降りるといいだし、降ろしてあげると先に走って帰つていった。横では、あらあらとアリスが優しく笑つていたが、ハジメは内心ほつとしていた。

アリスを一気に持ち上げたとき、ハジメは腰をやつていた。かつこつけた手前、どうにもならずに我慢をしていたが、もしアリスが途中で降りず、家まで肩車をしていたら大変なことになつていただろう。

先に帰つていてください、もう少し街を見てまわりますとアリスにいふと、夜ご飯の支度をしながら帰りますといい、家に向かつていった。アリスの姿が見えなくなると即効で腰を叩く。

「ああああ…理系の俺、無理しそぎ…」

腰をとんとんと叩いていると、後ろから声がかかる。野太い男の声だった。

「おうー！ いちゃん！ 怪我良くなつたんだな！」

筋骨隆々のおっさんだった。はて、こんな知り合いかどうか、いや、男性の知り合いなんて長老くらいしかいないぞ…などと考えてみると、それが顔にでたのだろうか、おっさんは自己紹介をしてくる。

「ああ、そういう氣を失つていたな！ 僕はアイン…この村の警備を

してゐるもんだ！氣を失つてたおめえさんを村から診療所まで連れてつたのも俺だぜ？」

ひげ面のおっさん、アインは仕事終わりなのか、少しだらしの無い格好だったが、それが逆に似合っていた。

「ああ、そうでしたか…。怪我はすっかり良くなりました。ありがとうございます」

お辞儀つきのお礼を言つと、アインは慌ててたいしたことしてねえから頭をあげな！といい、俺のことはアインと呼べ、などとアニキ風をふかし、その場をさつた。

腰の痛みが引いてきたところで家に戻ると、少し機嫌が悪そうに見えなくもないアリスと、くすくすと笑つているイリスが料理をしていた。ただいま、と少し照れくさくいうハジメに、二人はおかえり、と返す。その人のご飯は少し贅沢で、とてもおいしかった。

- side イリス -

街を見てまわるというハジメと分かれて、イリスは家に戻る。今日のご飯は、ハジメさんが新しい家族になつた記念に奮発しようと考えていた。

家に帰つて出迎えたのは、アリスだった。肩車がはずかしかったのか、先に帰つていたアリスは、平然とした顔でテーブルに座つた。ただいま、というとお帰りと返す。しかし、そのあとで少し首をかしげる。どうしたのとたずねると、少し照れたようにな

「…ハジメは…？」

と聞いてきた。アリスがハジメに魔法のことを自ら伝えたと聞いたときは驚いたが、アリスがハジメのことを日々に日々に気に入っていることがわかり、嬉しくなるイリス。今も姿が見えないハジメのことを気にかけている。

街を見にいったことを告げると、珍しく不機嫌になる。きっと連れて行つてほしかったのだろうことをすぐに見抜く母親は、その娘の姿がほほえましく、しかし少しさびしくなつた。やはり、父親がいたほうがいいのだろうか、私では親としてできていなかつたのかと。少し落ち込むが、それなら母親は私で、父親はハジメさんね…あら、嫌だわ…と一人で盛り上がつていた。

アリスは面白くなさげに皿を並べる。しばらくすると、思つたよりも早くハジメが帰つてくる。ただいまといふ言葉を少し照れくさそうに言うハジメに、アリスと一緒にお帰りなさいと伝える。すぐにアリスの不機嫌を感じ取つたハジメがイリスに皿で合図を送るが、イリスはそれを二口二口と見るだけだった。

- side out -

いつもより豪華なご飯を食べ、いつもより不機嫌なアリスをなだめ、いつもの寝る時間になつていて。ご飯を食べながらハジメは思つていたことがあつた。

俺、このままじゃ、ひもじやね?と。

母と娘の一人暮らしというだけで、地球では大変な生活を送ることになるだろう。そんなところに男が転がり込んできたら、食費だ

けで大変なダメージを家計に『与えて』しまうのではないか、そういう考
えていた。

これは火急に仕事を見つけなければならない、と思つたハジメは、
イリスに聞こいつと思つたが、思いどどつた。イリスのことである、
きつと遠慮することは田に見えていた。そこでハジメは、アインに
聞くことを決め、眠ることにした。

朝、少し痛む気がする腰をちょっと気にしつつ、イリスから聞き出
したアインの家を訪ねることにした。

冒険八日目（前書き）

本当に過去編が長くなりそうですので、いつか話を統合して短くしたいとおもっています。ゆっくり進んでます。おせえＹＯ－！と思つ方、もうしわけありません。

朝起きて、顔を洗い朝食を食べる。イリスとアリスには朝食時に出かけることを伝え、イリスにはアインの家を聞く。アリスは少しさびしそうにしていたが、脱ひも生活を目指すため、ここは我慢してもらひ。

そしてお昼が過ぎた頃、ハジメは慣れない農作業をしていた。アインに相談しに言つた結果、お金と食料を同時に作ることができると言われ、イリスに聞いたところ、家の裏の畠は今何も作つていなと言われ、よし、農家の真似事をしてみるかと意気込んだのが失敗の始まりだつた。

「の…農業…なめて…ましたつ…」

ゼーハーゼーハーと息も耐え耐えに土を耕す。だいぶ放置されたいた畠なのか、家の裏にあつた畠は草は生え、土は固くなつていた。イリスに借りた農具で草をむしり、土を掘り起こしたところでハジメの体力は尽きた。もともと体力があるほうではないハジメからしたらがんばつたほうである。イリスの夕飯ですよという声を聞く頃にはなんとか土を掘り起こす作業が終わつたところだつた。

風呂という習慣が無いため、土まみれの身体をよく拭く。少し痛い身体を引きずりながら食事をする。いつもよりおいしく感じたのは働いたからだろうか。

食べているときに、アリスに何を育てるのと聞かれ、ハジメが決めてないことを伝えると、ポテモ（ジャガイモに似たこちらの世界での主食）はどうですか、とイリスに言われ、育てることを決めた。大体一月ほどで食べいろの大きさに成長し、収穫できるとこう。ア

リスが何か言いたそうにしていたので、聞いてみると、アッププリと
いう果実を作つてほしいといわれた。アリスの好きな果物らしいが、
最近は作つてている農家が少なく、なかなか食べれないといつて
こつちは食べられる果実が実るまで一ヶ月ほどらしいので、作つて
みるよと言つと、嬉しそうにしていた。

翌朝、ハジメの身体を激痛が襲つていた。筋肉痛である。あまり
の痛さに起き上がるることもできなかつたが、十分ほどかけてなんと
か立つことができた。一步前進すると激痛が走る。慣れない作業を
したせいなのか、全身筋肉痛になつており、動けなくなつたところ
にアリスがハジメの部屋にやつてきた。朝食できたよ、といつてな
ぜかその場に立つて動かないハジメの手を引く。ハジメの切ない声
が家中に響いた。

朝食を食べ終わることには何とか動けるよになつたハジメは、
近くの農家を回つて種をもらつことにした。アリスもついていきた
いといつたので、イリスに許可をもらいアリスと共に家をでる。道
案内をアリスに頼むと手を引いて案内してくれた。あまり早く動く
と身体が痛いのだが、言えないハジメであつた。

農家の家々をある程度周り、ポテモとアップリの苗をもらつこと
ができた。がんばれよ、と激励の言葉までもらい、村の人の温かさ
が身に染みた。

裏の畑に来たハジメは、土の状態を見る。農業に詳しくないハジ
メではあるが、この土が畑に適していないことだけは判つた。砂漠
一步手前のような状態なのだ。農家を回つたとき、畑も何箇所か見
たが、似たような土だつた。この土、栄養がないんじゃないか。ハ
ジメが思つた疑問だつた。肥料は何を使つていいんですかと聞いた
ハジメに、肥料?と聞き返してきた農家の人の反応を見て、原因が
わかつた。

てつとり早い肥料は人の肥しである。が、アリスやイリスに頼むことなどできるはずもなく、肥料の概念のない村の人から集められるわけもない。完全に変人扱いになることは目に見えている。そこでハジメは残飯を肥料にする機械が日本の家にあつたことを思い出す。残飯を箱の中に入れておくといつの間にか肥料になっているアレだ。残飯なら家からもでるし、食事屋にいけば大量にもらえるかもしれないと思ったハジメはさっそく向かう。アリスには留守番をしてもらい、村へと走つていった。

ほどなくして、残飯をもらつてきたハジメは畑にまきながら耕す。臭いが出ては困るので、埋めるようにして耕す。その作業だけで時間を使つてしまつたが、種を植え付けるところまでは何とかすることができた。水をまき、今日の作業を終える。

食事中、アリスが畑に何をしていたのと聞いてきたので、土に栄養をつけていたんだよと答えると、親子一人してキヨトンとしていた。問題は次の日起きた。

「ハジメさん…ハジメさん…起きてください」

ゆさゆさと身体が揺れ、ハジメは目が覚めた。今朝は身体に痛みはなく、むしろ運動をしたせいか調子がいいようにさえ見えた。目の前には少し困つたような顔をしたイリスがいた。朝食には少し早いとおもつたハジメはどうしたんですか、とたずねる。するとイリスはやはり困つたように答えた。

「その…畑なんですが…昨日栄養とか言つてませんでした?何かしらなんですか?」

残飯をばらまきましたとは言えないハジメは、ええ少し。と言葉を濁した。そこでまどから漂う臭いに気がつく。これは、確實にものが腐った臭いだった。まさか、と思ったハジメは急いで畑に向かう。異臭の原因がそこにはあった。畑からだだもれの異臭は、このままでは村に広がること間違いなしであつた。

イリスにどうにかします、と謝り、朝食の準備をしてもらつ。その際、家の窓をすべて閉めてもらうことにした。

一人になつたところで、ハジメは考える。臭いをどうするか、では無く、成長が早すぎるということを。昨日植えた種は、すでに芽が出て、葉をつけていた。土も、昨日のように砂漠のような土ではなく、栄養がありそうな土壤になつていた。なによりもこの臭い。いくら残飯とはいえ、一日で腐つたりはしないはずだつた。一体どういうことだ、と考えている間に十分ほど過ぎ、考えがまとまらないと語ると、やつと臭いをどうにかしないとな、と考え始めた。

さりに上から土をかぶす、しかしせつかく芽が成長しているのでこの案だけは使いたくない。どうしたもんかと考えながらもハジメは植物に水を撒く。臭い浄化の魔法でもあれば便利なのに、と考えながら水を撒いていたハジメは、

「臭い消えろー浄化净化 」

と言いながら、やけくそ気味に作業を行う。すべての水を撒き終わる頃に異変に気がつく。臭いがしないのだ。さつきまでしていた臭いがまったくしない。水が臭いを消してくれたのか、水にそんな力はないと直ぐに考えを変える。これだけ成長が早い世界だから、分解も早く、臭いの原因である残飯が水と合わさることで即効分解された、というのが無理矢理なハジメの回答だつた。とりあえず臭いは消えたのだ。少しほっとして家に帰る。ただいま、とハジメが

なれてきた挨拶をすると、朝食の準備をしていたアリスとイリスがお帰りと答えてくれるはずだった。

「 おかげ…」

言葉は最後まで発せられることは無く、イリスの気まずそうな顔と、アリスの驚く顔によつてさえぎられた。どうしたんだろうと思つてみると、イリスが優しい田と声で、大丈夫ですから、と言つてきた。なんのことだらうと思い、どうかしたんですか、とたずねると、少し恥ずかしそうな顔をしたあと、ゆっくりとハジメのズボンに向かつて指を刺す。場所的には股間。少なくともイリスの様な女性が指を刺す場所ではなかつた。が、ハジメがそこに田を向けると、今度はハジメが驚愕した。

濡れていたのだ。まるでお漏らしをしてしまつたよつ。

「 なんじゅ じゅあああああ…」

思わず叫んだハジメは、自分の身に何が起こつているのかもわからず、混乱していた。

- side イリス -

朝、変な臭いがすることに気がつきイリスは田が覚めた。日に日に暑い夜になつてきたので、窓をすこし開けながら寝ているが、その窓から臭いが流れ込んでいた。外に出てみると、どうも畠のほうから臭いが出ているようだつた。

そういえば、昨日ハジメさんが何か栄養をやつたといつていたわ

ね… そう考えたイリスは、ハジメに聞いてみようと思い、ハジメの部屋に行く。寝ているハジメを起こすのは申し訳ない気持ちになるが、この臭いが村中に広がるのは少しまずい気がしたイリスは、心中であやまりながらハジメを起こす。

直ぐに臭いに気がついたハジメと一緒に畑に向かう。どうにかしますので、と言い家に戻るように言われたイリスは、頬もしいわ、と思いつぶやいたとおりに窓を閉め、朝食の準備をしていた。

朝食の匂いが家に広がるころにはアリスが起きてきた。おはようと挨拶をした後に顔を洗いに外に出る。帰つてくると、お外臭いといい、今朝の話をする。ハジメが言うなら大丈夫、と誇らしく言うアリスを見て、いつの間にそんなに仲良くなつたのかしら、とイリスは思いながらもやはり嬉しく、ほほえましくなる。

アリスに手伝いをしてもらい、そろそろ料理が出来上がるということころ、ハジメが帰つてくる。ただいま、という声にかけりがないことを見ると、どうやら解決したようだつた。お帰りなさいと答えようとしたところで、ある一点に田がいつてしまつ。女性としてそこだけに目がいくのはとても品のよくないことだとは思うが、しかしそれもしかたない。ただいまと言つ笑顔のハジメの股間が濡れていただの。それはもう見事に。

イリスは、ハジメのことを二つ、勘違いしていた。一つは年齢、ハジメを十五、六歳くらいと思っていた。もともと童顔のハジメだが、日本人特有の黒髪黒目が特に若く見せていた。もう一つは身体の傷である。そのことでハジメを歴戦の戦士と思っていた。これら二つの勘違いと、田の前のことが合わさつたとき、さらなる勘違いを生む。

戦いすぎて、身体に障害をもつてしまつたのではないか、と。

その後、ハジメが自分のズボンが濡れていることを発見すると、驚きのあまりに声を上げていた。それを見たイリスは、さきほどを考えが間違つていないこと確信し、ハジメに優しく大丈夫ですよ、と声をかける。それでもやはり恥ずかしかったのか、顔を赤くしてハジメは部屋に走つていった。その姿を少し可愛いと思つてしまつたイリスは不謹慎と思い、首を振り考えを消す。

料理を盛り付け終わつたところでズボンを変えてきたハジメが恥ずかしそうに帰つてきた。違うんです、アレは匂いを消すために水を撒いていて、その水が…と椅子に座つた瞬間に言うハジメに、アリスが、私も昔していたから…と恥ずかしそうに、でも優しくハジメに言つ。人に気を使えるようになつた優しい娘を見て、イリスは嬉しくなる。ハジメの違うんだーと言う叫びも聞こえないほど胸のいっぱいになつたイリスは、何事もなかつたように食事にすることにした。

その日の朝食にはその話は一切でこなつたが、それが逆にハジメをいたたまれなくしていた。

朝食を手早く終え、逃げるよひに部屋に戻ってきたハジメ。いつもより優しい気がする田や、まったくさきほど「アレ」に触れない話題…すべてがきつかった。

「あ…あれば…水だと思つんだ…」

誰に言つわけでもなく、呟く。布団の中で。生まれてきて25年、あんなに恥ずかしいことはなかつた。穴があつたから入つてみた、まさにそんな状況だつた。

コソコソ、と扉がノックされる。正直今は出たくないところだが、そんなわけにもいかず、ハジメはドアを開ける。そこにはアリスが立つていた。自分の失態を見たとき、アリスの表情は驚いていたな、と思い、また落ち込んでくる。が、アリスの話はそんなハジメの度肝を抜く内容だつた。

「ハジメ…お兄ちゃん…魔法……使えたの?」

ハジメに衝撃が走つた。「お兄ちゃん…アリスがハジメのこと呼ぶのは初めてかもしれない。しかも今まで言われたことのないハジメお兄ちゃん。双葉という妹がいたが、いつも「おい」とか「ねえ」と呼ばれていたため、正直敬称にあこがれていた面もあつた。が、成長するとそんなこともなくなり、気にもしなくなつていた。そこにアリスのお兄ちゃん攻撃。ダメージは甚大だつたが、今はそれよりももっと重要なキーワードが聞こえた。

「魔法…だと?」

そう、魔法である。使えたの？と聞いているからには使ったのだろうが、ハジメにはそんなことをした覚えもない。むしろ恥をかいだ覚えしかなかった。しかし、アリスは魔力の流れをハジメから感じたという。

魔法には、魔力に言靈を乗せることで初めて発動し、魔力条件や言靈は人によつて様々なものがある。特に魔力条件は重要で、本人でもわからないことがある。珍しい魔法条件の場合、一生気がつかないこともある。アリスの場合、魔力条件は魔力の消費、言靈は頭に思い浮かべるだけでいいのだという、好条件のスペックだつた。

アリスからの追加の魔法講習を受け、ハジメは考える。アリスは魔法が使われると、魔力の残り香のようなものを感知することができる。つまり、ハジメに魔力を感じたということは、ハジメには魔法を使う力が備わっているはずである。魔力条件、言靈、それらを探し当てたとき、自分は魔法使いになれるかもしれない。そう考えるとハジメはニヤリと口角をあげ、フフフと笑い出した。それを見てアリスが少し怖がつていたが、今はそれを無視して、今朝自分にあつたことを思い出す。アリスには悪いが、考えたいことがあるとい、一人になる。

今朝はイリスに起こされた。畠から異臭がしたからである。それは昨日の肥料が原因であり、その臭いをどうにかすることを約束して、水を撒いてしばらくすると臭いが消えた。と、そこまで考えたところで畠に行つてみることにした。

臭いのなくなつた畠に行くと、ハジメは驚愕した。今朝まで芽がちよろつとでていただけの植物は、もう五センチほどの大きさになつていた。ありえない成長速度である。そこでハジメはハツとする。植物の急成長、埋めた残飯の急激な腐敗。自分が掘つた土にどれも

関係しているのではないか、そう考える。しかし、そうなると問題は言靈である。何かぶつぶつと言いながら作業をしていたかもしれない。アリスのように頭で思い浮かべるだけでいいのなら、何か考えながら作業していたのかもしない。しかし、思い出せない。どうしたもんか、とうとううなつていると、後ろからパキッと枝の折れるような音がする。振り返ってみると、そこにはこそつとこちらを見てこるアリスがいた。

田が合ひうと、アリスは少し慌てたように姿を隠す。が、もう見つかっているので意味はなく、しかたないな、とハジメはアリスを呼んだ。ついでに自分の考えたことを聞いてみる。

「アリス、俺には土の属性があるのでないかと想つのですが、どうすればわかると思つ?」

「土属性があると想う理由と一緒に告げると、アリスは少し考えたあとに、

「それだけ…で、属性のことは…わからない…けど、魔法…使えた…魔力条件に…何かが起こる…魔力…減つた感じ…した?」

「自分の魔力が減ったのかどうかわからなかつたハジメは、わからぬ」と答え、家に戻る。自分の部屋で考えをまとめることにした。

魔法は、魔力条件と、言靈がそろつたとき、発動する。魔力条件は魔法を使った代償なので、今は無視。問題は言靈である。アリスに聞いてみると、昔読んだ本の中に、いろいろな言靈の条件集という本があり、その中には、「五文字以上の言靈」だとか「早口言葉」など、変わった言靈もあつたそうだ。条件付の言靈の場合、見つけるのは苦労しそうだ、と考えたところでの、お皿ですよーと言つイスの声が聞こえた。

お昼を食べる頃には、両者すっかり今朝のできごとを忘れていた。ハジメとしては助かつたが、それよりも魔法のことでの頭がいっぱいだつた。それは、そんな何もない平和なお昼に起つた。

「た…大変だつ…！」

村中に広がるような大きさの声が、食事中に響いた。何事かと顔を見合せながら、全員で声のした方へ向かう。つく頃には他の村人も集まつており、輪の中には一人の男がいた。男はところどころ傷を負つており、カディナが傷の手当をしていた。

「イニ…どうした！？何があつた！？」

アインが男に声をかける。イニと呼ばれた男は、よほど急いで来たのだろう、息が上がつており、それでも話そうとしてむせていた。村人の一人が水を飲ませ、落ち着かせると、イニは話し始めた。

「ゴ…ゴブリンの群れだ…三体や四対じゃない…何十対つていやがつた…！」

ザワリ…と村人に恐怖が広がる。イニが言うには、山に狩りに出了かけた際、なかなか獲物がいないので普段は入らない山の奥まで言つてみたところ、動物の屍骸が散乱していたという。何事かと思い、もう少し奥までいくと、ゴブリンたちが何十対と集まつていたという。

「ゴブリンリーダーが複数いるかもしけんな…」

そう呟いたのは長老だつた。その発言にさらに村人たちに不安の色が広がる。長老は、アインや警備の物を数人引き連れ、今夜中に

村の決断を決めるから、今は各自非難の用意をしつつ、家の中で待機となつた。

ゴブリンという単語はなんとなくわかつたが、それ以外のことや、村人がおびえる理由がいまいちわからないハジメは、とりあえず家に戻る。ゴブリンとの戦闘経験があるハジメは、数十対くらいなら、村の男全員が戦えばどうにかなると考えていた。普段運動などしていなかつたハジメでも怯えながらに勝利することができたのだから、筋骨隆々のアイン率いる警備の者たちがゴブリンに負けるとは思えなかつた。しかし、不安がつてゐる村人。それから察するに、ゴブリンリーダーという存在がそれをさせないのだろう、とハジメはあたりをつけた。

家に帰つてテーブルに座るが、誰も言葉を発しない。そこでハジメは、ゴブリンのことを聞いてみる。戦つたことがあるが、村人でどうにかならないのか、と。それを聞いて口を開いたのはイリスだつた。

「ゴブリンが少数で群れるのは珍しいことではありません。しかし、何十対で群れるというのはまずありません。そんな場合はゴブリンリーダーと呼ばれるゴブリンがいるのです。ゴブリンリーダーがいる群れは、統率がとれており、厄介なんです。それに、ゴブリンリーダー自体も強いのです」

説明を受け、納得がいった。数十対の統率の取れたゴブリン…一個小隊クラスが攻めてくるようなものである。辺境に近いこの村が到底太刀打ちできるものではなかつた。アリストが言つには、今日明日にでも非難する他道はなく、今から国や街に討伐依頼を出しても、間に合わないだろうとのことだつた。

「アリストが…もつと…魔法使えたら…」

そんなときだった。アリスがぼそつと言つたのは。アリスは自分が魔法を使えることを村の人にはらしても助けたいと思っていた。それを聞いたイリスはそつとアリスを抱きしめ、そんなことしなくても大丈夫…みんな助かるから、と。

しばらく非難する準備を進めていた、イリスが部屋に来る。手には鞘に収められた剣を持っていた。形としてはククリ刀と青龍刀の間といったところか。

「これは？」
「義兄さんが持つていた剣です。といつても手入れだけして一度も使つたことはないそうだんですが…持つていてください」

そう言つてイリスは剣を渡してくる。意図することはわからないが、もしものことがあつた場合、使えるかもしない…とハジメは思う。カッターは巨大カマキリを倒したときに折れたし、他に武器もない。非難しているところを襲われたとき、アリスやイリスを守るために剣があつても損はしないだろうそう考へ剣を受け取る。鞘から抜いた剣は、長らく手入れがされていないにもかかわらず光り輝いており、前の持ち主が大切にしていたことがわかつた。思つていたよりも手になじみ、重さもそんなに感じない。たつた数日畳仕事や力仕事をしただけだが、思ったよりも力がついたのか、前のハジメからは考えられないことだつた。

非難の準備が終わり、少し早めの夕食を終えた頃だつた。長老の使いの者が家を訪ねてきて、これから集会があるとのことだつた。一応背中に剣を差し、全員で集会場に向かう。村人全員が来たことを確認すると、長老は重い口を開いた。

「皆の者、残念なことじやが、村は放棄する。村も大切じやが、命はもつと大切じや…戦つて散す命があつてはならない」

長老の言葉に、村を捨てるという少しの悲しみと、戦わないという選択を取ったことへの安堵が広がる。殿は警備の者が務めることなどを話し、今後の行動を話しているときに、警告を告げる鐘が鳴り響いた。

「敵襲　　つ！敵襲　　つ！」

外から大きな声が聞こえた。ざわつく集会場。子供の泣き声や、ざわめきが大きくなつてきたといひで長老が口を開く
「静まれい！戦える男連中は直ぐに守りを固めよ…女子供、年寄りはここで待機じや…こつなつたら…逃げることはできん…すまぬ、皆の者…」

どんどん小さくなる言葉に、集会場は静かになる。最初に言葉を発したのはアインだつた。

「うおっしゃー！いくぜー野郎どもー！」生きて残つた英雄には綺麗な嫁さんが待つてゐるぞ…！」

大きい声で勢いよく飛び出していくアインに、警備のものたちはオーー！という答えを持つて集会場を飛び出す。その後から数人の男たちが立ち上がり集会場を飛び出していく。

ハジメは怖かつた。ゴブリンはそれほど脅威じやないことはわかつてゐる。しかし、突然の襲来が、痛みなど感じなくなつたはずの二の腕の傷が、ハジメを動かせないでいた。ゲームではないのだ。

死んだら終わりである。日本に帰ることもなく、しらないこの土地で死ぬ。その恐怖に震えていた。

「いいんですよ。無理をしなくて。無理はしてほしくないんです」

そう言つて優しく抱きしめられた。イリスの温かい胸の中で涙が出来た。同時に手を握りしめられる。

「ん…みんな、一緒…」

アリスの優しい声が胸に響く。そうだ、この人たちがいる。イリスやアリスをゴブリンなんかに傷つけられてなるものか、と思ったハジメは、恐怖が消えるのを感じた。

「行つてくるよ」

なるべく平静を保つて立ち上がる。アリスは悲しそうに俯き、イリスはしばらくたつて一言だけ、死なないでくださいといい、泣きながら微笑んでいた。この恩人や村の人を死なせるわけにはいかない…そう思つたハジメは、集会場を飛び出した。

- side イリス -

ゴブリンの襲来に備え、食料などの準備をしているときだつた。物置になつてゐる部屋の中で、一振りの剣を見つけたイリスは、これが義兄が大切にしていたことを思い出す。しばらく考え、この剣をハジメに渡すことに決めたイリスは、ハジメの部屋を訪ねる。部屋に入つて剣を渡すと、剣を抜き、確認していた。そのときの

顔が少し悲しそうに見えたのは、部屋の影のせいか。イリスは自分がしていることが最低なことだと思っていた。ハジメが歴戦の戦士であることはわかっている。しかし、守る戦いをしていたのだろうハジメにつけた傷。さらに今朝見たような身体の障害…それらを知った上で、知らないふりをしてまた剣を持たせた自分。この人はきっと戦うだろう。村を、自分たちを守るために。なんと浅ましいことか。自分自身がいやになってきたイリス。ハジメはありがとうといい、また準備に戻った。

夕食を食べ終わったときだった。長老の使いが呼びに来たのは、集会場には村人が集まつており、長老の言葉を待っていた。戦いでではなく、非難を選んだことを告げると、村には安堵が広がっていた。イリス自身もすこし安心していた。これでハジメが戦うことはない。ハジメに剣を渡したことを誤りうとしていたときだった。

「敵襲　っ！敵襲　！！」

警告を告げる鐘が鳴り響く。ざわめく集会場の中で、長老が声をかけた後、アインが飛び出していった。アインは昔からああいったタイプだった。不器用だけど面倒見のいい人。今だつて、わざとふざけて村の人の不安を少しでも取ろうとしていた。それにつられてか、村の男たちが集会場を出て行く。ハツと気づいてハジメの方を見る。武者奮いなのか、恐怖から来るものなのかはわからないが、ハジメは少し震えていた。これも障害の一種なのだろうか。剣の柄を握り、震えている。

自分はなんということを…そう思つたイリスは、ハジメを抱きしていった。もう、戦わなくていい、無理はしなくていい…と声をかけていた。アリスも手を握り、言葉をかける。しばらくすると、震えがとまり、すっと立ち上がる。

「行つてくるよ」

そう言つて少し悲しそうに笑う。自分はひどい女なのかも知れない。剣を持った戦士がここで行かないわけがない。言つた言葉を取り消すことはできない。剣を渡した過去をなかつたことにすることはできない。そう悔やみ、帰つてきたらすべて誤ることに決めたイリスは、一言、死なないでくださいと伝えた。精一杯笑顔で言えるようにしたが、涙が溢れてきた。恐怖からではなく、自分の情けなさからだった。

ハジメが集会場を出た後、私は……最低です……と泣き始めたイリスに、アリスは驚いた。いつも笑顔でいたイリスが泣くところなど、見たことがなかつたからだ。

「おかあ……さん？」

不安な顔をしたアリスが手を握つてくる。アリスを抱きしめ、イリスは泣き始める。ごめんなさい、と言いながら。それがハジメに誤つているとは思わないアリスは、ただただ大丈夫、と母親を優しく抱きしめていた。

- side out -

冒険九日目（後書き）

一日のニークが三行を記録するよくなりました。すいへうねいです。

魔法に関するあやふやなといふがすでにできそうな臭いがふんふんしますが、流し読み程度でしまかしてもらいますと、助かります。読んでいただき、ありがとうございます。過去編もやひやひ終盤です。

外に飛び出していったハジメは、まず指揮を取っているアインのところへ向かつた。

「おう、ハジメか…戦ってくれるのはありがてえが、傷はもういいのか？」

「いえ、気にしないでください。それより、こいつとの戦力と向こうの戦力は？」

情報は命にかかる。そう考えていたハジメは自分なりの作戦を考えるため、アインにたずねた。敵はおよそ四十体。リーダーの姿が見えないところから、まずは第一波といつたところか。確かに、指揮がとれているゴブリンたちであつた。これに対しても「こちらは」兵が十、剣士が十五、農具をもつた男が十五の計四十人。数の上では今のところ互角だが、こちらは総力、あちらはまだ余裕がありそうだった。

まずはいな、ハジメは聞いて直ぐに思う。数が圧倒的に違いすぎる。ハジメの予想では、第一波での人数を送るということは、すくなくとも倍近い戦力をまだもつていると判断する。準備もしていない状態ではいつまでたえれるかわからなかつた。ともかく、今はこの第一波を退けることが何より大事なことだつた。

「アインさん、この戦闘が終わつたら相談があるんですが…」「なに…？わかつた。とりあえずお互ひ生き残りうじやねーか！」

バシバシと肩を叩かれる。何がうれしいのかワハハと笑うアインに首をかしげながら、村の入り口にいく。百メートル先にまでゴブ

リンたちは着ていた。弓兵の射程距離はおよそ三十メートル。あと少しで戦闘開始だった。

「撃てえええ！」

AINの掛け声とともに弓が放たれる。十人の弓兵が放った矢は何匹かのゴブリンにある。村の入り口にいる剣士や男たちが大きな声を上げながら敵に突つ込む姿を見て、この世界には兵法もないのだろうか、とハジメは思った。しかたなしにハジメもゴブリンに向かつて走り始める。

剣を抜き、向かつてくるゴブリンに切りかかる。カッターよりも間合いの長い剣は、思ったよりも早い速度で、思ったよりもあっさりとゴブリンを葬る。あれ、とハジメは思う。森であつたときはみんなにも恐怖し、苦戦したゴブリン。武器が変わつたからと言つてこんなにあつさり倒せたものか。不思議に思うが、それが今はありがたかつた。一体二体と倒していくと、少し周りを見る余裕が出てくる。警備や村の男たちは、一体につき二人以上で対応している。幸い、ゴブリンは足が遅い。後続のゴブリンが来る頃には次の対処できており、今のところ死人は出ていなかつた。AINの方は、と視線を向けると、前方に二体、後方に二体と囮まれていた。まずいと思つたハジメは走つてAINのところまで向かう。

AINの背中を切りかかろうとしていた二体のゴブリンをきりつけ、AINに背中を合わせる。助かつたぜ、と言つてAINに答え、二人でゴブリンを駆逐していく。時間にして十分ほどだつたろうか、本人たちにはもつと長い時間が経つていたように感じたが、村を襲つてきたゴブリンを全部倒すことができた。死人もなくほつとしていた瞬間、警告を知らせる鐘がなる。

「敵襲　　つーゴブリンです！数は…さつきの倍はいますつー」

見晴らしのいい高台から聞こえてくる声は、男たちの氣力を奪う。もうだめだ…などといった声がちらほらと聞こえてくる。敵が村に来るまでもう時間がない。ハジメは考えていた策をAINに伝える。

「なるほどーそれならいけるかもしだねえなーしかし、それじゃーおめえが…」

「時間がです！盾だけかしてもらえませんか？死ぬつもりはないので…」

時間にして数分もたっていなかつたが、AINは結局折れ、ハジメの作戦を飲むことにした。木の盾を借りたハジメは、剣を片手に敵に向かつて走り出した。後ろではAINの集合をかける声が聞こえてきた。

ハジメの提案した作戦は、「ゴブリンを村に入れる」と言つものだつた。ただし、村の入り口を狭くし、少数しか通れないようにする、といった条件付で。入り口が狭くなつたことで、進入してくる数を制限し、数の有利をひっくり返すという作戦であつた。さらに、後ろでつづかえているゴブリンに対しては弓と投石による攻撃を行う。ゴブリンリーダーによつて統率が取れているとはい、所詮はゴブリンである。この作戦を回避する頭はないと読んだのだ。村はぐるつと周囲を木の塀で囲まれ、入り口はAINたちがいつも交代で立つてゐる入り口一つだけである。ゴブリンの力ではこの塀は壊せない。しかし、この作戦にも弱点があつた。村を固めたり、石を用意する時間がないのだ。その弱点を補うためにハジメは単独で時間稼ぎにいつたのだ。

一百メートルほど先にゴブリンの群れが見える。さきほどのように隊こそ組んでるが、ばらばらに行進してきていた。ハジメにとつ

ては好都合である。時間稼ぎが目的のハジメにとつて、数で来られる逃げるしかないのだ。準備が終わるとのろしがあがることになつていて。それまで何とか耐えるぞと思ひ劍を構え走つた。

英雄願望があるわけではない。ただ、守りたい人たちができた。運動が得意でもなく、すさまじい知識があるわけでもない。25歳にして無職。毎日ゲームやテレビを見ていた男。それがハジメだつた。それがこの世界に来て少しずつ変わつていつた。恐怖がなくなつたわけではない。今でも立ち止まると体中が震えるだろう。身体が痛くないわけがない。今でも敵の攻撃が掠つた箇所からは血が出ている。それでも劍を振るのをやめないのは、またあの笑顔が見たいから。たつたそれだけの理由だが、男にはそれだけでよかつた。

二十体は切つただろうか。息が上がつてきたハジメだが、身体の違和感を感じる。先ほどよりも敵の攻撃が遅く感じる。弱く感じる。それは攻撃をくらつたときに確信に変わつた。疲れから反応が遅れ、敵のナイフを腕にかすめてしまつたのだ。また切れたか、と思ったハジメだが、赤くなつていったものの、腕は切れていなかつた。

疲れを取るために少し距離をとり休すむ。赤くなつた腕を見て、防御があがつたのではないか、という考えを出してみる。敵を倒すたびに経験地をもらつてレベルアップしているとうゲーム風な考え方だ。同時に何をばかな、と考えを否定する。ゲームではないと学んだのだ。きっと武器が錆びていたか、刃がつぶれていたのだろうと考えをまとめ、また敵に向かつていく。のろしさはまだ上がらない。

あれからまた十対ほど倒したときだつた。ひときわ巨大なゴブリンが出てきたのだ。手には劍と盾を持ち、体格はハジメと同じくらいだろうか、他のゴブリンよりも筋肉が発達していた。

「ゴブリンリーダーか…」

そう呴いたハジメの田の前にいるゴブリンリーダーは、怒つているように見えた。そのとき、リーダーが奇声を放つ。その瞬間周りにいたゴブリンたちはハジメを無視し、一斉に村に向かって走り出した。させるかっと思いゴブリンを追いかけようとするが、ゴブリンリーダーが襲い掛かってきた。今までのゴブリンよりも早く、重い一撃をなんとか受ける。盾で押し返し距離をとる。背中を向ければやられるであろう相手に内心舌打ちをするが、ちらつと村を振り返ったときに見えたのろしが目に入る。それを見たハジメはニヤリと笑い、

「残念だつたな。お前の作戦は失敗するぞ」

とゴブリンリーダーに向かって言つたのだった。

- side アイン -

村の男たちに投石用の石と入り口を塞ぐ木材を探させてすでに10分が過ぎている。本来ならすでにゴブリンたちが来ているだろうが、来ない現状を見ると、ハジメの足止めは成功しているのだろう。しかし、一人である数のゴブリンを相手にするのはランクBの冒険者でもきついかもしれない。それがアインの考えであつた。ゆえに急いで準備をする。男手総出で入り口に突貫工事をし、村中の石をかき集め、高台や、一番近くの家の屋根に弓兵や投石部隊を用意する。準備が出来、のろしを上げた瞬間にゴブリンが走ってきた。

「くそつ……ハジメつ！ 死ぬんじゃねえぞ！ 野郎ども！ 来たぞつ！ 作戦はわかつてゐな……！」

のろしよりも早くゴブリンたちが来る。それがどんな意味なのかを知っているのはアインだけであったが、士気を下げないためにもアインは指示を出す。入り口を制限したことにより同時に二、五匹しか入つて来れず、入つたところでゴブリンたちは待ち構えていた村の男たちに葬られていった。さらに投石や弓が決まりその数をどんどん減らしていった。

「よしつ！いいぞ！油断するな！手の空いたものは他からゴブリンなどもが入つてこないか見回るんだ！ついでに石も拾つて来い！」

指示を出しながら、アインはハジメの無事を祈る。ゴブリンリーダーの姿はまだ見えない。ゴブリンリーダーはそこらのゴブリンとは違つて戦闘に特化し、頭が言いだけではなく、強いのだ。それを知つているアインは、まだ見ないハジメと、ゴブリンリーダーに不安を覚えた。

- side out -

強い。戦つてみて思つたことである。ゴブリンとは違つて、武器をうまく使い、こちらの攻撃が当たらない。森にいた頃のハジメなら開始五分で切られていたらう。しかしハジメもうまく盾を使い、ゴブリンリーダーの攻撃を避けていた。どちらも攻め手にかけていた。こんなとき、魔法の一発でも使えた…と考えていたハジメだが、ゴブリンリーダーが急に奇声を上げたことに驚く。その瞬間背後から物音が聞こえたので思いつきり右に飛ぶ。ころがりながら直ぐに体勢を整えるハジメだが、顔には苦痛が浮かんでいた。足に槍のようなものが刺さつていたのだ。ゴブリンリーダーの近くに走つていいく一体のゴブリン。鎧のようなものも着ており、さしづめ、ゴ

プリンリーダーの近衛兵といったところか。ゲヒゲヒと汚い笑いを浮かべているゴプリンどもに切れそうになるが冷静さを取り戻す。ほぼ互角だった状況に、敵の増加、自分自身のダメージ。これはまずい。そこまで考えたが、敵はそんな時間など与えてくれず、近衛兵が突っ込んできた。痛い足を引きずりながらも一体の首を跳ねる。すぐさまリーダーが襲い掛かつてくる。なんとか剣を受け止めるが、足に踏ん張りが効かず押される。盾で殴り、距離をとるが、今度は身体がふらつく。おかしい、足は確かに痛いが、ふらつくほどではないはずだ、そこまで考えてまさかと思つ。

毒

やつと氣づいたかと言わんばかりにゲヒゲヒ笑う相手の姿を見て、確信に変わった。ますますまずい。さつさと倒して村まで走つて解毒しないと、死にいたる毒かもしれない。不安が焦りを呼ぶ。毒によるダメージもあったのか反応が遅れ、腕を少し切られる。これ以上の流血もまずい。まさにハ方塞だった。

息が荒くなる。呼吸が落ち着かない。視界が悪い。足元もおぼつかない。また腕を切られた。少し深く切られ、剣を落としそうになる。盾を投げつけ、距離を取る。血が止まらない。

「まづい…早く治療…いや先に止血しないと…」

傷口を押さえながら焦る。突っ込んでくるゴプリンリーダーを何か避けながら剣を構える。その瞬間違和感を感じる。腕が痛くない。傷口を見るが、傷がなくなっていた。まさかと思い、ズボンを見る。ズボンは股間の辺りが濡れていた。

絶対もらしてはいない。それだけは言える。ならなぜ濡れている？なぜ傷が治つている？ぐるぐると考えが頭の中を駆け巡る。やがて一つの考えにたどり着く。

魔法。

治療の魔法、属性、今朝のこと…すべてが一つに繋がる。ハジメの属性は、水。烟の臭いを消したのは、土によるものではなく、水による浄化、血が止まり、治つたのは水の魔法による治療。すべてを悟るとハジメは笑い出した。突然笑い出したハジメにゴブリンリーダーは一瞬戸惑つた様子を浮かべたが、ハジメが吐血したのを見て、ハジメに襲い掛かる。毒は今もハジメの身体を蝕んでいた。

襲い掛かつてくるゴブリンリーダーの剣を剣で受け止める。さつきよりも重く感じる一撃をなんとか受け止めるが、立つていられない。毒が身体を回つてきたのだ。ふらつく身体に鞭を打つて距離を取る。幸いだつたのは、弱つた獲物をなぶる趣味でもあるのか、ゴブリンリーダーが一気に襲つてこないことがだった。

自分の予想を確信に変え、手を胸の辺りに持つていく。そして言霊を呴いた。

『解毒』

とたんに身体の調子が良くなる。同時にズボンの染みが広がつていぐ。それを見たハジメは嫌なほつの予想も当たつていたことに悲しくなる。そう、ハジメの魔法条件は「魔法を使うとズボンが濡れ

る」と言つものであつた。少々突つ込みたい気持ちになるが、今はそんなことよりも魔法を使えるようになつたことが何よりの僥倖だつた。

遠距離からの攻撃が出来るようになれば、形勢は逆転する。アリストの話だと、治療や補助に特化した属性だとは言つていたが、攻撃がまったくないという話は聞いていない。水の鞭や針などを出せるのならば、これほど助かるものはない。水分は常に空気中にあるのだ。それらを集め、攻撃に使うことをイメージする。手をゴブリンに向け、言葉を放つ。

「水の鞭！」

魔法は発動しない。続けて水の針と唱えてみるが魔法は発動せず、ズボンに変化もなかつた。なぜでない！？ そうあせつている間にゴブリンリーダーは攻撃を仕掛けてくる。毒が治つた今、ゴブリンリーダーの動きが遅く感じる。否、実際に遅いのだ。ゴブリンリーダーにもダメージがあつた。毒により気がつかなかつたハジメは、もう一息と思い、魔法のことは捨て、剣による攻撃を仕掛ける。しかし盾で防がれる。逆に反撃を受けてしまい腹を切られる。そう浅くも無い傷がつく。弱つている敵に油断をしていた。自分の甘さに舌打ちし、再び治療と唱える。すると、先ほどとは違い、傷は治療されていく。回復や補助しかないのだろうか。しかし、一つの仮説がハジメの頭に浮かぶ。

「傷を癒せ」

身体に手をやり、唱える。しかし魔法は発動しない。やはり！ 思つたハジメは直ぐに手を横なぎに振りながら唱える

『水鞭！』

手の動きにあわせ、水の鞭がしなる。まともに受けたゴブリンリーダーはわき腹に受けて吹き飛んだ。魔法を発動させた手を見て、ズボンを見て確信する。ハジメの言靈の条件、「二文字限定」であることを。

先ほどとは違つて一気に半分ほどまで濡れたズボンは、治療魔法と違つて攻撃魔法の消費が激しいことを表しているのが、少し重くなってきたズボンを気にしながら、立ち上がってきたゴブリンリーダーに視線を送る。傷も治せ、毒も治せ、遠距離攻撃も可能になつたハジメはニヤリと笑い、勝利を確信する。あの盾邪魔だな、と思ったハジメは言靈を唱える。

『水刃』

円状のこぎりの様な水の刃が弧を描いてゴブリンリーダーの盾を持つている手に飛んでいく。盾でガードするも、木の盾などあつさりと切り裂き、腕ごと持つていく。ゴブリンリーダーの叫びが広がる。剣を振りかざし走つてくる敵に対し、今度は足に目掛けて言靈を放つ。

『水刃』

ゴブリンリーダーの足が切られ、その場に崩れ落ちるはずだった。しかし、魔法は発動せず、ゴブリンリーダーの攻撃を受けてしまう。左肩から斜めに大きく切られたハジメは、痛みのショックと、出血でその場に倒れた。それを見たゴブリンリーダーは勝利の雄たけびを上げ、村へと歩みを進めた。

作戦は順調だった。半分以上のゴブリンを順調に葬つていく。こちらはけが人こそいるが、死人は出でていなく、このまま順調に倒せば、村も捨てなくてすみ、ゴブリンたちに怯えることもなくなる、はずだった。

「アインーーーっ！」「ゴブリンリーダーが走つてくるぞーーーっ！」

高台から聞こえた声に戦つていたものたち全員が戦慄する。さらにリーダーが来たからかゴブリンたちの動きにも変化が見られた。ただただ細い入り口に突つ込んできただけだったゴブリンたちは、隊列を組み、入り口の木材に攻撃を仕掛けってきた。まずいと思ったときには遅く、入り口を狭くしていった木材が崩れる。広くなつた入り口には数十対のゴブリンと、片腕のゴブリンリーダーがいた。

ハジメはどうなつたのか、片腕のゴブリンリーダーがいることを考えればそれはわかりきつたことだった。アインは心の中でハジメに謝り、自分に渴を入れる。

「野郎どもっ！やつは片手だつ！恐れることはないっ！！！」

少しでも士気を上げるために声を出す。すると大きな声と共にゴブリンたちが突つ込んでくる。一人で一体を相手するように指示を出すと、アインはゴブリンリーダーのもとへ走つていく。自分が抑えている間に、ゴブリン全員を倒し、村人全員で相手をすればどうにかなると考えていた。しかし、アインは自分の考えが浅はかだったか、と後悔する。片腕のゴブリンリーダーなら、なんとか一人で抑えられると思っていたが、その迫力はすごかつた。片腕だからこそ、か、ゴブリンリーダーの目は血走り、武器を振り上げ力任せに

振り下ろしてくる。両手で受け止めても重い一撃は、たった一回の攻防でアインの気力を奪い取る。

村人の助けが欲しいが、隊を組み始めたゴブリンに手こずつてらしく、こちらに来る様子はない。まずいと焦ったアインに容赦なくゴブリンリーダーは襲いかかる。重い一撃を何度も繰り返し叩きつけてくる。徐々に防御する腕がしびれてくる。今の一撃で完全に握力をなくしたアインは盾を落とし、剣で受け止めるが、片腕で受けには重すぎた一撃を受け、傷を負いながら吹き飛ばされる。次の撃でいよいよどめといったところで、炎が飛び、ゴブリンリーダーを襲う。突然の炎をくらい、叫びながら転がりまわるゴブリンリーダー。何が起こったかわからないアインは炎が飛んできた方向を向く。そこには集会所に非難しているはずのアリスが、苦しそうに立っていた。

「アリス…おめえ…」

魔法が使えたのか、そう言い掛けたアインの言葉を遮るようにゴブリンリーダーの叫び声が響く。怒りからか、痛みからなのか、炎に焼かれ、さらに醜くなつたその顔をアリスに向ける。アインはまずいと感じたのか、両者の間に割つて入る。まずはアインが邪魔だと思ったのか、ゴブリンリーダーは剣を振りかざし、攻撃を仕掛けてくる。しかし、先ほどの炎のダメージがあるのか、一撃の重さは減っていた。

「アリスっ！今すぐ集会場に戻るんだっ！…！」

攻防の中、アインはアリスに向かつて叫んだ。こんな小さな子供を戦場の中においていたら、イリスにもカカアにも怒られるぜ、そう考える余裕が出てくるほどには均衡を取り戻したアインは、心の

中でアリスに感謝した。しかし、アリスは、

「あとひ…一回だけ…使えるからひ…」

普段聞いたことのないような大きな声。その声から、どれほどその場にいることか恐ろしいかが伝わってくる。優しい彼女のことだ。きっと本来は魔法が使えることなど誰にも伝えたくなかつたのだろう。一瞬でそれらを悟つたアインは、叫ぶ。

「俺が隙を作る…」
けると思つたらいつでも撃てつ…」

「クリとうなずく姿をアインは見ていない。隙を作らうと必死に戦う。幸いにも相手は左腕が無い。ハジメがやつたのかはわからな
いが、今はそこを徹底的に攻撃する。左側を攻撃されることを嫌が
るゴブリンリーダーは、一度距離を取ろうと剣を振るが、ダメージ
を負つた攻撃ではアインの追撃を振り切れない。いらだつたように
大きく振りかぶりが、そこに隙を見出したアインの一撃を受けてしま
う。ニヤリとするアインだがゴブリンリーダーは攻撃を食らうこと
を予想していたのか、肉を切らせて骨を断つ。そのまま剣を振り
下ろした。

切られる! そう思ったアインだが、振り下ろされる剣と、ゴブリン
リーダーの姿は一瞬で吹き飛んだ。アリスの魔法によつて。

「どんぴしゃだぜ…」

魔法を扱うセンスに驚くも、助けられたことに素直に感謝するア
イン。魔法を食らつて燃えるゴブリンリーダーはもう動く様子はな
い。他のゴブリンたちもほとんど倒されていて、今、最後の一体が
倒された。村人たちの勝利だつた。

湧き上がる閑静のなか、ふらふらのアリスを支えるアイン。魔力を

使いすぎたのか、少し熱っぽい顔をしたアリスにすまねえな、助かつたぜとアインは伝える。アリスは少しばにかむと、きょろきょろと周りを見渡し、

「ハジメ…お兄ちゃんは…？」

と聞いてくる。その言葉にアインは何も言えなくなる。暗い顔をしているアインを見て、勘のいいアリスは嫌な予感がする。

「嘘…ハジメ…お兄ちゃんつ…」

大きな声を上げながらハジメを探すアリス。ふらふらとおぼつかない足取りだが、誰も止めることはできなかつた。ゴブリンを倒して皆喜びの声を上げていたが、アリスの様子に気がついたのか、静かになつていつた。アリスの泣くような声だけがその場に響いていた。

アリスが泣きながらハジメを探しているときだつた。ゴブリンリーダーの屍骸の傍まで来たとき、ゴブリンリーダーが起き上がる。武器を振りかぶり、アリスに向かつて振り下ろす。その間、誰も動くことはできなかつた。一人を除いて。

痛みのないことを不思議に思つて目を開けたアリスは、自分が優しい温かさに包まれていることに気がつく。アリスの目に映るのは、今度こそ本当に倒れたゴブリンリーダーと、自分を抱きしめるイリスの姿だつた。

■陰十一日田（前書き）

久しぶりの上、少し短いですが、よろしくお願ひします。

- side イリス -

ハジメが集会場を出て、どのくらいの時間が経ったのだろうか。外から時折聞こえる叫び声は集会場の人たちに不安を与える。村の男たちが全員倒れたとき、ここに残っている人たちも蹂躪されるのだろうか、そんな考えが浮かび上がり、さらなる不安を加速させる。

ぎゅっとしがみついていたアリスの手が緩んだのを感じ、どうしたのかと見る。ハジメが外に出てから、一言も話さず、ただ俯いていたアリス。急に立ち上がったかと思うと、少し神妙な顔をしていた。まさか手伝うと言い出さないだろうか、そんな不安が頭をよぎるが、アリスの言葉に力が抜ける。

「…トイレ…行きたい」

一瞬なんのことかわからなくなるが、直ぐに安堵し、少し気持ちが軽くなる。我が家のお姫様はずいぶんと肝が据わっているわね、と思いつながらも一緒に行動こうと立ち上がると

「一人で…大丈夫…」

と言われたので、親離れの年なのかしら、と少し寂しく思いながらも座りなおした。トイレはこの建物の裏口にあり、外に出ることはない。安心して使えるのだが、集会場にはたくさん的人がいる、今もトイレ待ちで並んでいる人は多い、時間がかかるだろう。

「本当に大丈夫？」

と改めて聞くと、うん、ありがとうといつてトイレに向かうアリス。その途中で一度振り返り、何かを言つが、聞き取れなかつた。

時間にして十分ほど経つただろうか、少し遅い氣がするとアリスは思い、そんなに人が並んでいたのかとトイレに向かう。すると、トイレに並んでいる人数は五人ほどで、今出てきた人はアリスではなかつた。列にも姿が見当たらない。一瞬、どういうことかわからなくななり、パニックになるアリス。

急いで自分たちのいたところに戻るが、やはりアリスの姿は見当たらない。大声で叫びアリスを探すが見つからない。他の人たちが何事かとアリスの方へやつてきて、事情を聞くと集会場の中を探すことになつた。

さらに十分が過ぎてもアリスは見つからなかつた。アリスは振り返つたときのアリスの姿を思いだす。少し悲しそうな顔で口を動かしていた。あの口の動きはなんだつたか…

ふと、隣のスペースの兄弟が喧嘩をしている光景が目に入る。お兄ちゃんが手をだしたようで、弟に申し訳なさそうに謝つていた。

「じめんなさい」

瞬間、アリスは入り口に向かつて駆け出す。周りがとめる声も聞かず、ひたすらに走つた。

外は家が燃えているのか、かがり火よりも明るい炎が見え、燃える匂いがした。

あの子が無事でありますように。それだけを祈り走る。金属と金属がぶつかる音が聞こえてくる。村人の歓声だろうか、声が大きく

聞こえてきたとき、視界が開けた。泣きじゃくるアリスと止んでいく歓声。アリスの姿を見てほっとし、それから怒りうつアリスに向かって駆け出す。その瞬間、アリスの後ろで何か大きな影が起き上がる。

背中の熱さと胸の中の温かさが入り混じり、イリスはその場に崩れ落ちる。燃えるように背中が熱い。たぶん切られたのだろう。しかし、自分はアリスを守れた。それだけが誇らしかった。

「ア…リス…嘘…ついちゃ…だめじゃ…な…い」

最後の力を振り絞り、アリスを怒る。しかし、顔は微笑しかでなかつた。ああ、なんて愛おしい子なんだろう。なんて優しい子なんだろう。アリスの心の葛藤をすべて理解したイリスは彼女がどれほど悩み、辛い決断をし、この場にいるのか、それを考えていた。

「お…か…あさん…？」

状況が飲み込めていないので、アリスが呆然と見ている。ああ、最後くらいは笑顔のアリスを見たかった。そう思いながら暗くなつていく視界にただ何もできないでいる。

「お母さん！お母さん！」
「イリスッ！－！」

アインの声が聞こえる、しかし、その姿はもうイリスの目には映らなかつた。そういうえば、ハジメさんはどうしたのだろう。そんなことを考えながら、だんだんと意識がなくなつてくるのを感じた。ああ、この子の成長した姿を見たかったな、どうか村の人やハジメさんがいつまでもこの子のために

身体が熱い、痛い、一体どうなつていい…そこまで思つてハジメは起き上がる。その瞬間身体に激痛が走る。思わずつめき声を上げる。しかしその痛みで何があつたかを一瞬で理解したハジメは考察する。

『水刃』が発動せず、ゴブリンリーダーに切られた。ここには判る。しかしなぜ突然魔法が発動しなくなつたのか、二文字と言つ条件は見たいしてはいたはずである。少し考えたが、村から上がる炎が見え、痛みに鞭をうち、立ち上がる。自分は一体どのくらい気を失つていたのだろうか、村は無事なんだろうか。痛みのためゆっくりとしか歩けないことにいらだつ。そのとき、ふとズボンが濡れていることに気がつくが、膝下まで乾いていることに気がつく。一回田の『水刃』を使った時点で、足首まで濡れていたはずなのに…とそこまで考えたハジメは氣づく。

「わつか…もう濡れるとこがなかつたのかつ…」

『二文字の言靈』を使い、魔法を使つと、『ズボンが濡れ』、『ズボンが濡れるまで魔法を使える』

これがハジメが出した結論だった。自分の結論の正しさを証明するため、もう一度『治療』と唱えてみる。傷はふさがり、痛みが消えていく。ズボンに田をやると、スネのあたりまで濡れていた。そこで魔力の消費が多い『水刃』を使おうと思ったが、この先何があるかわからないと思い、不必要的魔力消費を避けることにした。

痛みがなくなつたことで村へと走ることになつたハジメだが、もう直ぐ村と並ぶときに歓声が上がる。村のみんながどうとつやつたのか、と思つたハジメは歩みを緩める。歓声に混じつて聞こえる泣き声がある気がするのだが、村までまだ距離があるために涙のせいかと思つ。

「ここまで走つてきて思つたことが、全体的に身体能力が少し上がつてゐる。これについてもまた考察する必要があるなと思つたところで悲鳴のよくな声が消えてきた。

「お母さん……！」
「イリスッ……！」

ハジメはすでに全力で走つていた。現場に着いたときには、アリストと、アインと、血の池につかるようにして横たわるイリスがいた。その周りでは村の男たちが目を伏せ、顔を背けていた。ゴブリンはもうまわりにいないので、喜ぶ人はだれもいなかつた。

「なにがあつたっ……！」

叫ぶようにして声をだすハジメにアインが驚いたように声を出す

「ハジメーお前生きてっ
「アインセラフー！」

まるで別人のようになったハジメに氣おそれるアイン、ことの終始をハジメに説明するとハジメはすでに意識がなく、だんだんと呼吸が小さくなつていくイリスを見た。

「お母さんつーお母さんつー……！」

ハジメが隣にいることにも気がつかないアリスを見て、ハジメは一つの決心をし、アインに少し頼むといって、イリスの家まで走りだす。そこで一つの実験をして、自分の考えがただしかったことを証明し、もどつてくる。

「ハジメ、おめえ一体何を…」

アインの疑問にも答えず、今は急ぐ。泣き叫ぶアリスに呼びかかるが、まるで気がつかないので、『めんと謝り、頬を叩く。やつと気がついたアリスはハジメに抱きつき泣き始める。

誰もがイリスの死を待つしかない状況でハジメだけが諦めていかつた。

「命の恩人をこんなところで死なすわけにはいかないしな…」

そう呟いて、もう一度アリスに謝り、引き離す。イリスを抱き上げ、手ごろな台の上につつ伏せに寝かせ、そして呟いた。

『治療』

ハジメの手から優しい光が放たれる。見る見るなくなっていくリスクの傷口を見て、誰もが驚きの表情を浮かべる。あらかたの傷がなくなつたことを確認すると、今度は『解毒』を唱える。念のためである。この段階でズボンはすでに膝上まで濡れていた。

水の属性は治療に特化したものである。しかし、ハジメは、次の魔法がどれほどの効果があり、どれほどの魔力を消費するのかわからなかつた。それどころか、発動するかも怪しい魔法だつた。しか

し、唱えないわけには行かず、また、今ならまだ間に合ひうと思つたからだ。

『蘇生』

眩いた瞬間、まばゆい光が辺りを包み込む。よし、発動したと思ったのもつかの間、自分でもわかるほどズボンの濡れ方が半端じやなかつた。あつという間にスネを超えて足首まで到達した瞬間、ガンツ！と何か鈍器で頭を殴られたような衝撃がハジメを襲つた。

魔力切れである。しかし、まだイリスは息を吹き返していない。ここから先は命を削つての魔法である。それを抑えるために身体は緊急処置として氣を失おうとしている。しかしハジメはそれに耐えながら魔力の放出を続ける。

トクン、と心臓の鼓動が聞こえた氣がしたとき、ハジメはどうとう氣を失つた。その後に聞こえた大きな歓声を聞くこともなく。

基本、ハッピーホンダ主義ですから。。。

■絵十一四四（前書き）

今回から（）を使って心の中の言葉を表現してみました。

色々試しているので何かあれば『気軽に感想に書き込んでもらえます
とうれしいです。

身体全身の痛みを感じ、ハジメは目が覚めた。全身筋肉痛の様に身体が痛む。はて、そんな運動したつけな、と考えたところで「ゴブリンとの死闘がフラッシュバックする。

「やうだつ！ゴブリンッ！ つう…」

急に上半身を起こしたことにより体中に痛みが走る。筋肉もそろだが中も痛む。筋肉が、骨が、臓器が悲鳴を上げるような、これまでに感じたことのない痛みに悶絶する。魔力を酷使した代償だと気づいたのは直ぐだつた。なぜ魔力を酷使したのかを思い出したからだ。

（イリスさんはどうなつた…、助かったのか？村は？どうなつている…）

焦るハジメだが、身体が痛くて動けない。歯がゆい思いをしているときにドアが開けられた。桶のような入れ物とタオルもつて入ってきたのは今一番氣にしているイリスだつた。部屋に入つてきて扉を閉める。振り返つてハジメの姿を見た瞬間持つっていたものを落とした。桶からこぼれた水は床一面に広がり、びしょびしょになる。大丈夫ですかと声をかけようとしてハジメはぎょっとする。その瞬間には温かい体温に包まれ、肩は桶の水とは違つて濡れていた。

「お母さん？」

床に水をこぼした音で来たのだろうアリスが部屋に入ってきた。イリスはこんな状態で話せないので、おはようとアリスに声をかけ

る。その瞬間アリスも泣きながら抱きついてくるのだからハジメは正直焦った。

こんなに心配してくれるとこはそれなりに危なかつたのかかもしれない。迷惑をかけたな…と思いつつも今まさに命の危険を感じているハジメ、全身が悲鳴を上げているところに女性とはいえ大人一人、子供一人の体重がかかっているのである。しかし、痛いのでぞいてくださいとは言えない。それなりに空氣の読める男であった。

ハジメがこの苦しみから解放されるのはもうしばらく後だった。

一人が落ち着いてきたころ、あの戦いの後、ハジメが気を失つてからのことを見かされた。

ハジメが倒れてからすぐにカディナが呼ばれ、アリスと共に診療所まで運ばれたらしく、ハジメがアリスにしたこを聴いた瞬間カディナは顔を青くしたという。ともかくカディナが治療したのだが、魔力酷使の影響が強く、正直助かるかわからないといわれたそうだ。カディスはアリス以外の人を追い出して、ハジメの治療にあたり、その間アリスはアリスにずっとついていたとのこと。カディナの診断だとアリスはもう大丈夫といわれていた。

今夜が峠と言われたハジメだが、カディナの懸命の治療により一命をとりとめた。次の日にアリスは目覚め、村中の人々が喜びに溢れていた。すべての事情を聞いたアリスはハジメを家に運んでもらい、看病していた。その間、アリスはもう一度アリスにしかられていた。それから一週間が経ち、現在にいたること。

「一週間も寝ていたのか…」

ハジメにしてみたら昨日のことのようだった。あの熱氣、ゴブリンリーダーとの死闘。すべてがまだ残っていた。そう思っていた矢先に腹の音がなる。そういえば戦闘から何も食べていないな、と。そう思つたら氣になることができた。

「一週間、何も食べてないのに…どうやって俺は栄養を取つていたんですか？」

点滴などもちろんないであろうこの世界で一週間も寝込んでいられるのが不思議に思つたハジメはイリスに質問してみた。イリスの説明によると「治療の水」と呼ばれる水がありカディナからもらつたとのこと。高いらしいが村の人たちが少しずつお金を出してハジメのために買つたことを聞くと申し訳ない気持ちと嬉しさでいっぱいになつた。もう一つ気になつてどうやつてその水を取つたのかを聞くと、秘密ですと振り返り、「飯にするからアリス、手伝つてくれる？」と部屋を出て行つてしまつた。後ろから見えた耳は真つ赤だつたことはハジメには見えなかつた。

窓から外が見える。もうお昼だらうか、遠くで木材を運ぶ村の人のが見える。恐らくは村の復興のためだらうか。イリスが用意してくれた痛み止めが効いてきたのだろうか、痛みが少し和らいだ気がする。すこしふつと出でてみると直ぐにふらついてベッドにしりもちをつくる。

「一週間も寝てたからな…生まれたての小鹿だな。まつたく」

と咳き、身体をほぐしつつ軽くストレッチをする。後で村の人やカディナにお礼を言わなければと咳き、ふと考へ付く。魔法で痛みが取れるのではないか、と。しかし、魔法を使いすぎて体が痛むのにそこに魔法を使うのは…まずくね？と思つたハジメは取り合

えず入念にストレッチに励み、キッチンに向かつた。

キッチンでは一人の親子が料理をしており、ハジメの姿を見かけ
ると、もう大丈夫なんですかと声をかけてきた。はい、と答えたハ
ジメは手伝いますといつたがもちろんやんわりと断られ、手持ち無
沙汰になる。まだ時間がかかるように見えたので裏の畑に行くこと
にする。ハジメが寝ている間、アリスかイリスが恐らく水をあげて
いたのだろう畑はとんでもないことになっていた。

「なんだ…これ？」

根菜であるポテモの葉はすでに収穫が出来るほど大きく、アップ
リの木も一メートルはありそうなほど伸びていた。それぞれ本来は
一ヶ月から二ヶ月かかる植物である。植えてから十日も経つていな
いのにこの成長はやはり魔法のせいだろうか。

取り合えず水を撒こうと思うが井戸から組んできていないことを思
い出すと急にめんどくさくなり、魔法を使おうと考える。人差し指
を上に向け、水の球を作るイメージをして呟く。

『水球』

小さな水の球が出来上がり、どんどん大きくしていく。程よい大き
さになつたところで畑の上に移動させ弾けさせる。満遍なく畑に
水が降り注ぎ、魔法が使えるようになつたことが夢じやなかつたこ
とを再確認したハジメは自分の条件も再確認することになる。

『水球』は水を集めるだけの魔法だつたのでそんなに魔力を使わな
いようだが、そのせいで逆に「それ」が本物に見えた。

（これは…まずいですよ…）

不用意に使うものではないなと思つたハジメは自分の部屋の窓まで走り窓から家に入つて着替えた。それから何事も無かつたかのようにキッチンに戻ると、丁度いい具合に準備が終わつたようでもみなどご飯を食べる。少し豪華な食事は回帰お祝いだそうだ。食事中何度もアリスと目が合うがなぜかそらされ、自分は何か下のだろうかと思う。アリスの様子を伺うと少し顔が赤くなつて熱だらうか、思いつつも急にフラッシュバックしたように自分が倒れたときの様子が思い浮かぶ。

魔法を使う ズボンびしょ濡れ ハジメの条件と知る人はいない
前科有り

「はっ！？ちちちちちちち…ちが…ちがうんやあ～～～～」

絶叫したハジメはなぜか関西弁だった。

- side イリス -

ハジメさんが意識をなくしてもう一週間が経つ。桶に水を入れ、タオルの準備をする。すでに田課となりつつあるハジメの身体を拭くためである。年は離れているとはいえ、男性の身体を拭くのは抵抗が少しあつたが村の、自分の命の恩人である。しかも二度目となればいやでも何でもなく、むしろお願いしてでもお世話したいほどである。準備しながらアリスは意識が戻つた頃のことを思い出していた。

アリスの泣き顔を最後に見て、次に目が覚めるとカディナさんの診療所だった。私は助かったのだろうかと思っていると手に温かさを感じる。見るとアリスの手だった。ずっと握っていたのだろう。

疲れてベッドに寄りかかり眠っていた。しばらく優しくアリスを撫でていると、

「気がついたのかい？」

と、少し疲れた様子のカディナが顔を出した。慌てて治療のお礼をすると、私は何もしていないことの始終を聞かされた。聴き終わった瞬間にハジメの様子を聞いたが、カディナは苦笑しながら今峠を越えたよと伝え、疲れたから寝るといって出て行つた。恐らくはずつと治療をしていたのだろう。

それにしても、アリスは思う。一度も命を救われた。一度目は文字通り命を戻してくれた。自分を代償にしても。カディナの話だと、命は取り留めたが、いつ目覚めるか判らないという。明日にでも目覚めるかもしれないし、一生目が覚め中もしないと。なら、自分がするべきことは一つと心に決めたとき、握っていた手がもぞもぞと動き出す。寝ぼけ眼でアリスを見ているアリスにおはようと声をかける。しばらくぼーっとしていたアリスだが急に泣きながら抱きついてきた。アリスも何も言わずに強く抱きしめた。

しばらく抱き合つていたアリスだが、ふと思いつき、アリスをしきり始める。嘘をついたこと、黙つて戦場に行つたこと等。怒られながらも笑顔のアリスを見てアリスも起くる気をなくしたのか、もう一度抱きしめる。それからハジメのことをアリスに伝える。同時にこれからのこと。

翌日、カディナと相談した結果、ハジメは家で治療することになった。治療といつても世話をするだけだが、村の人がハジメのために用意してくれた「治療の水」を飲ませたり、身体を拭いたりとかなか大変な作業だった。しかし三日もすると慣れてきて、生活の一部になっていた。

アリスはあれから魔法に関する本を読むことが多くなった。恐らく自分の力不足を嘆いているかもしない。今も恐らく本を読んでいるのだろう。アリスの部屋の扉をちらりと見、そんなことを考へる。向かいにある扉をノックせずにあける。すこし礼儀がないようだが、ハジメは眠っているので無用だと思ったのだ。扉を閉め、振り返ったとき、持っていた桶を落としてしまう。

ずっと寝ていたハジメが起き上がっていた。驚きと喜びが湧き上がり、言葉にならなかつた。床にこぼれた水も気にしないでハジメを抱きしめる。よかつた。ただよかつたと。

こぼれた水の音を聞いてきたであろうアリスもハジメに気がつき、泣きながら抱きつく。嬉しくて、しばらくそうしていた。

それからハジメにこれまでのことを説明した。ハジメは、一週間も寝てたのかと呟く。そのとき、ハジメのお腹からぐう～～という音が聞こえる。少し恥ずかしそうになるハジメを見て、苦笑するイリス。「飯の支度をしなくてやと思つていたとき、ハジメから

「一週間、何も食べてないのに…どうやつて俺は栄養を取つていたんですか？」

と聞かれ、「治療の水」のことや村の人たちがお金を出してくれたことを伝えた。すると少し思案した顔になつたあと、どうやつて水を飲ませたのかを聞いてきた。その瞬間、どうやつて飲ませていたのかが頭に思い浮かび、真っ赤になつてゐるであろう顔を隠すため振り向き、秘密と答え、アリスと一緒に料理の準備をするといつてそそくひと部屋を出でるイリス。

準備している間にも少し顔が赤く、ときどき変な母親に首をかし

げるアリスだった。

料理が出来たころにハジメも丁度テーブルに着く。ハジメに少し違和感を感じたが、みんなでおいしくご飯をいただいた。ハジメを見てみると、また思い出してまともに顔を見れないでいると、

と、急に叫びだした。走つて部屋に戻るハジメを首をかしげながらアリスと見送つていたが、ご飯の片付けが終わる頃、何事も無かつたようにハジメがキッチンに現れ、カディナや村の人にお礼を言いたいと黙つて来た。

もしかしたら昔の記憶がもどり錯乱したのかもしれないと思つた
イリスは、ここは何事も無いように接するのがいいかしらと思つて、
出かける用意をした。

イリス、空氣の読める女であつた。

- side out -

■除十二三四（後書き）

感想、批評、おかしい点（「これはたくさんある」と）、誤字などがあればお知りください。

冒険十四日目（前書き）

時間があつたので忘れないうちに投稿。

また忘れない過去が増えたハジメは、イリスに村の人にお礼をいに歩き回ることを伝えると、アリスも交えて三人で行くことにつた。一番最初に向かつたのは長老の家。道中村の人に声をかけられねぎらわれた。英雄なんて言葉が聞こえたのは何かの間違いだろう。

長老の家に着くなりお礼を言われた。村を捨てずに済んだのはお主のおかげだと言われたのだ。どうやらアインがことの顛末を長老に伝えたらしく、なにやらちょっとどころではない誇張が入り、村を命がけで一人で救つた男になっているらしい。んなばかなっと思いつつも話はいつの間にかゴブリン達を追い払つた祝いと村の復興、ハジメの快気をまとめて祝う宴の話になつていた。もう否定はできなかつた。宴は今夜行うことになつた。

帰り道、危険な作戦をとつたことをねちねちと笑顔で攻められる苦行に耐えながらカディナと診療所についた。

「おや、目が覚めたんだね……」

ハジメを見ると少し驚いたカディナだつたが、柔らかい笑顔で迎え入れてくれた。軽い診察を受け、起きてからのことを見つくる。体中に痛みがあることを伝えるとやはり魔力の使いすぎだといわれた。どんな魔法を使つたのか、などと詳しく聞かれたがハジメは正直詳しく言いたくなかつたので（特に条件）、あいまいにかわしていた。わりとあっさり引いたカディナに拍子抜けしたが、後ろでイリスがカディナを睨んでいたのでそこら辺は察した。夜に宴があることを告げ、診療所を後にした。

家についてからはアリスは仕事に、アリスは部屋で読書になつた。ハジメは何か手伝えないかと言つたが、休んでくださいといわれ、部屋で休んでいた。

ふと鞘に収まつた剣が目に入る。アリスの父親が手入れしていたものらしき剣、正直この武器がなければあそこまで戦えてなかつただろう剣を抜く。

「ザツ……これはひどい……」

恐らくあのときからそのままであるう剣は、ゴブリンの血が着き、臭いを放つていた。夕方まですることは決まつたと思い、剣を研ぐ為に石を探す。手入れをしていたといふくらいだから物置にあるだろうとゴソゴソと漁つていたら研ぎ石らしい石を見つけた。剣を研いだことはないが、包丁くらいは研いだことのあるハジメは同じ要領だろうと井戸で水を汲み、剣を洗い、研ぎ始める。丁寧に、丹念に。

一時間ほど熱中していると、いつの間にか横にはアリスが座つて作業を見ていた。

「アリス……」めんな、熱中してて気がつかなかつたよ
「ん……」

少し休憩といい、手を洗つてアリスの横に座る。いいの？とアリスが聞いてくる聞いてくるので、大体は終わつたからと答え、部屋に戻る。部屋に戻つて一人でぐでつとしているアリスが口を開く。

「ハジメ……お兄ちゃん、魔法使つてた……」

まだ慣れない「お兄ちゃん」にむず痒さを覚えるが、そういうえば魔法のこと何も話してなかつたなと思い、一応師匠？にあたるアリ

スには説明することにした。魔法のこと、属性のこと。――文字という条件。そして。

「あー……あとな、魔法条件なんだが……なんだ……その……」

言いよどんでいると首をかしげてこちらを見るアリス。言うべきか、言わざるべきか、悩むハジメ。しかし、魔法を使えることを意を決して伝えてくれたアリスに對して自分が秘密を抱えるわけにはいかないと思い、思い切って伝えた。あと何度もあつた「誤解」を解いた。

話を聞いたアリスはハジメはポカソとした顔をしていたが、納得させるために『水球』を使って見せる。すると股間が少し濡れる。『水球』を大きくすると濡れ具合も大きくなつてくる。

「ちなみにただの水だからな」

誤解させないように釘を刺しておく。ちゃんと確かめたのだ。『水球』を消すとアリスは何やら思案顔で俯いていた。しばらくするとアリスは顔をあげ、自分なりの見解を説明してくれた。

曰く、魔力があがると、同じ魔法に付き、濡れ方が変わつてくること。

曰く、ズボンを変えるとまた魔法が使えるところはある意味魔力は無限に近いということ

曰く、このことはよっぽど信頼できる人でないと言わないほうがいいこと

など、ハジメが思つてもいなかつたことを伝えてきた。正直こんな恥ずかしい条件だれにも言いたくなかったが、魔力が無限にある

かもしれないというのは少し嬉しかつた。が、そのたびにズボンをいちいち変えないといけないのはどうかと思ったハジメだった。

剣を磨く作業を終え、部屋に戻るとイリスが帰つてくる。イリスを出迎え、しばらく話していると、そろそろ宴の準備が始まるので行きましょうと言われ、三人で向かうこととした。

村の広場に付いた瞬間大きな歓声がハジメたちを向かえる。

「来たぞー！ 村の英雄だ！！」

「アリスさん
ハアハア

アリストたんノノノノ

危険な思想も混じつっていた気もするが、突然のこと驚くハジメ、後ろでは成功ですね、とイリスが微笑んでいた。イリスの説明によるとさつき出かけたのは宴の準備で、ハジメを驚かすためにこの計画をしていたとか。

あれはあれほど壇上のやうな席に運ばれ、宴のオープニングの挨拶をすることになった。

「皆さんが俺のために「治療の水」を買つてくれたことは聞いています。この場を借りて御礼を言わせてください。ありがとうございます。この通り元気、といつても全身筋肉痛でまともにうごけませんが、五体満足です。ともかく、ゴブリンの脅威は去りました。今夜は大いに盛り上がりましょう！乾杯！」

その瞬間、村はまた歓声に包まれる。村の人からもみくちやにされ、御礼を言われ、快氣を喜ばれ、ハジメは宴を楽しんだ。しばら

くして落ち着いた頃、AINがHAJIMEに近寄つてくる。

「おう！兄弟！大変だつたな！」

「AINさん… そう思つたなら助けてくださいよ」

「ガツハツハ！俺が入らないことが助けることになると思つてくれよ！」

すでに酔つているのか、元からなのか、AINは上機嫌にバシバシと背中を叩いてくる。正直言つて痛いが、我慢するのがHAJIMEであつた。

「俺からも礼を言わせてくれ。死人が出なかつたのも、ゴブリンを倒せたのもおめえさんのおかげだ。ありがとう」

素直にお礼を受け取り、AINとしばらく飲み食いしていると、CADENAが寄つてくる。後ろにはIRISとARISが付いてきていた。

「やあ、英雄殿」

と、茶化しながらCADENAは上機嫌に肩を組んでくる。かなり酔つているようだつた。後ろで苦笑いしているIRISが手を合わせている。前の被害者であつた。

「英雄殿…、私はね、本当に感謝しているんだよ？一一度も…一一度もIRISを救つてもらつてえ… IRISはね？そりはもつ娘のよう可愛がつてきたのに最近冷たくつて…」

となぜかIRISが最近冷たくなつた話になつてきたところで気がつく。「娘と思って」ずいぶん若く見えるCADENAだが、いつたいいくつなんだね？ HAJIMEの見解では、IRIS（25）、ARIS（

「……、アイン（32）、カディナ（30）であるが、娘と思つ年齢ならば、もしかして…四十代後半だったりするのだろうか、なんということだらけ。異世界にきて一番驚くかもしないと思つていたとき、

「あらあ～？英雄殿はいける口だねえ？ほら、おねえさんと飲もうよお～」

と今度は絡んできた。いける口も何も元の世界にいたときも酒はたまにはのんでいた。むしろ祝いの席で飲まないなど言つてもいられなかつた。のだが、

「ダメですっ！カディナさん！ただでさえハジメさんは病み上がりなんですよ？たくさん飲ませちゃダメですよー！それからハジメさん！いくらお酒が飲めるようになる年齢を過ぎたからと行つても未成年なんですから！たくさん飲んじゃダメですよ？病み上がりなんですよし…」

とイリスが雷を落としてきた。カディナは反省してゐるのかしてないのか、ちえーと言つて引き下がるが、ハジメはどうしても気に入ることがあり、引き下がらなかつた。

「あの～イリスさん、お酒の飲める年齢つて？」

「え？ああ、そうでしたね。ハジメさんは違う土地からきていまし

たね。こちらでは一六歳から飲めますよ」

「そりなんですか…ちなみに成人は？」

「ええ、それまで違うんですか？成人は十八歳からですよ？」

「…イリスさんは俺をいくつだと思つてます？」

「えつ…その…一六歳か、十七歳くらいかな、と…」

その瞬間ハジメはがっくりとうなだれる。外国で日本人が年よりも若く見られるのは知っていたが、自分がまさか未成年に思われていたなんて……と。今考えれば確かに思い当たる節がいくつかある。もし歳が近い男としてみていたのなら、あんなに無用心に抱きついたりしないだろ？。なるほど、とハジメは思う。

「あの…ハジメさん…？」イリスさんつ！」はひい！」

突然顔を上げて名前を呼ばれたことに驚くイリスだったが、次の言葉が人生で一番驚いたのかもしれない。

「俺は、二十五歳ですよ…」

集瞬、時が止まり、

Г Г Г Г Г Г Г Г Г Г

と村中に絶叫が響き渡った。

「アリス、アリス、カティナ、アイン、近くにいた村の人たちが各自で「いや、でも」などと混乱していた。それぞれが、そんなばかなつ！ 嘘でしょ？ などと言つてきたので本当ですと答えていると、カティナが

「酔いが覚めたわ…」

とどこかに行つてしまつた。それからイリス、アリス、アインの年齢を知ることができた。イリスが二十八、なんと年上だつた。アリスは十一と二アピソ。アインはなんとイリスと同い年だつた。驚きである。しかし空氣の読める男ハジメ、誰にも何も言わず、そうなんですか、と済ませた。予断だが、カティナの年齢は誰も知らな

かつた。

夜遅くまで続いた宴はつつがなく終わり、それぞれの帰路についた。変える頃にはそれなりに酔っていたハジメは、帰つてベッドに入るなりそのまま眠ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3767s/>

ただし、使うとズボンが濡れる。

2011年7月24日17時19分発行